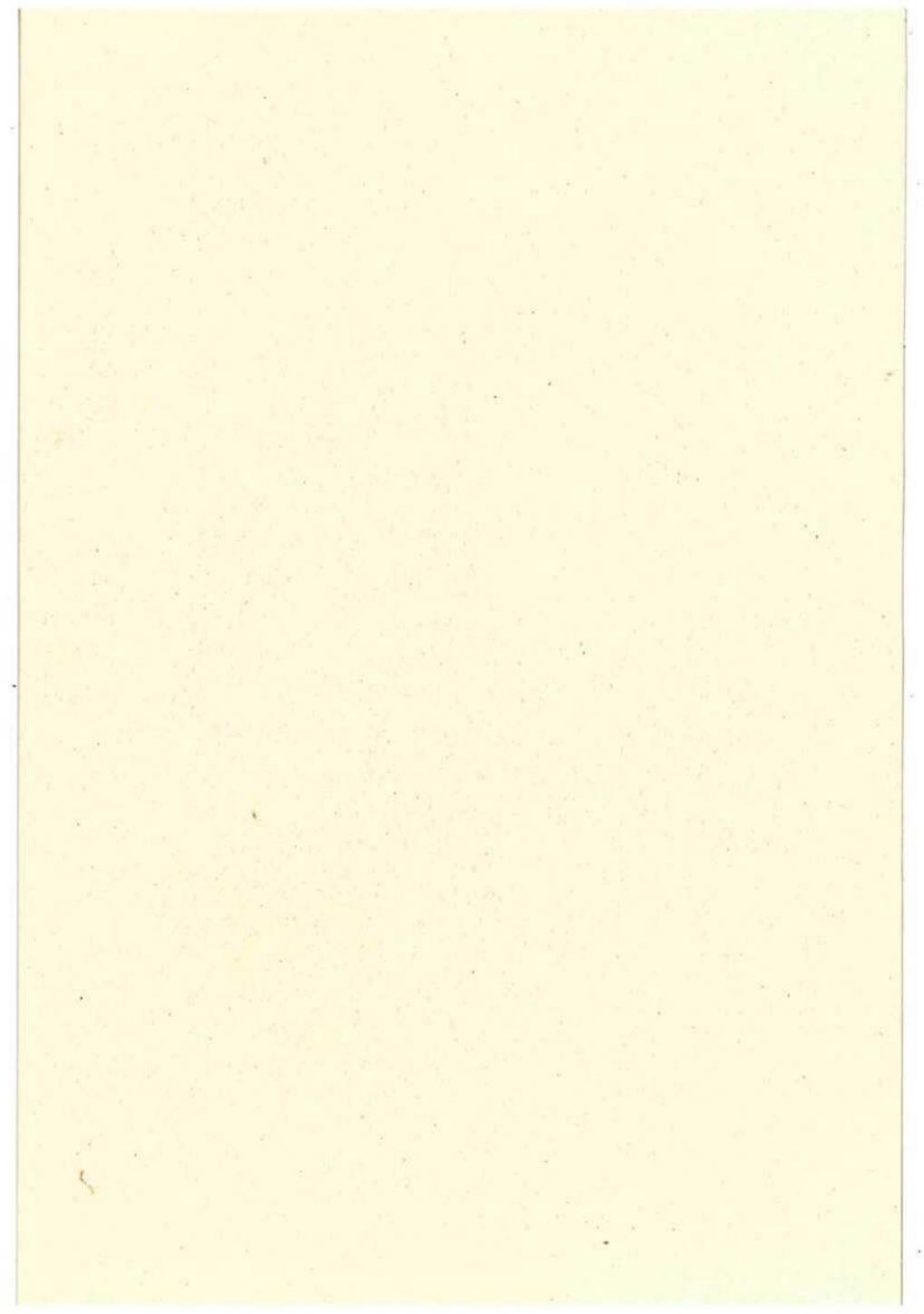


岩滑清水ヶ谷横穴群
岩滑松ヶ谷横穴 発掘調査報告書

1988

大東町教育委員会



岩滑清水ヶ谷横穴群 発掘調査報告書
岩滑松ヶ谷横穴

1988

大東町教育委員会

序 文

文化財の保護、保存が国民的課題として重要視され、貴重な文化遺産を守る活動が活発になってきたことは誠によろこばしいことあります。

中でも埋蔵文化財については、土に埋もれ包蔵地すらはっきりしないことが多く、知らないまま開発されるという危険が高いものであります。

このたび黒文化課の指導の基に、佐東土地改良区の理解ある協力を得て、茶園造成工事に先立ち、関係者の周到な準備のもとに、本町にとって初めての本格的な発掘調査が実施されました。この事業をとおして菊川流域に散在する横穴群の一部から郷土の大昔の人々の生活が少しづつ明らかにされてきました。

おかげで、郷土に対する認識が一層深まり”郷土を愛し、美しい自然を大切にしながら開発が行われ理想とする町づくりに前進できる”ことをうれしく思います。

ここに盛夏の中を発掘調査にたずさわっていただいた発掘調査の関係者、関係諸機関、佐東土地改良区の皆様に感謝申し上げるとともに、本書が資料として、お役に立てていただければ幸いであります。

昭和63年3月

大東町教育長 青野行雄

例　　言

1. 本書は県営農地開発事業（大東町佐東南地区）に先立って調査された、静岡県大東町岩滑字山田177-2に所在する岩滑松ヶ谷横穴（1基）と同町岩滑字山田545-2に所在する岩滑清水ヶ谷横穴群（3基）の発掘調査報告書である。
2. 調査には、岩滑松ヶ谷横穴が昭和62年7月4日から7月8日まで、岩滑清水ヶ谷横穴群が昭和62年8月6日から16日までを費やし、大東町教育委員会が主催して実施した。
3. 発掘調査は渡辺康弘（早稲田大学史学資料室）が担当者となり、調査に際しては進藤敏雄、小沢重雄（以上、早稲田大学大学院修士課程）、小泉龍人、水野敏典（以上、早稲田大学学生）、渡辺幸弘の諸君の応援を得た。また佐東南土地改良事務所には調査にあたっての全面的な協力を得た。
4. 出土した遺物等の整理は渡辺が中心におこない、進藤、小沢、小泉、水野、遠藤雅裕（早稲田大学学生）の協力を得た。
5. 本書の執筆は以下のように分担して行った。

川口 功（大東町教育委員会社会教育課長）	1
渡辺康弘	2, 4 A, 4 B 2) + 3), 4 C, 5 B, 5 C
五島康司（静岡県教育委員会文化課）	3
進藤敏雄	4 B 4)
小沢重雄	4 B 1), 5 A
6. 本書発行までの一切の事務は大東町教育委員会社会教育課が行った。
また全ての発掘資料は大東町教育委員会が保管している。

発掘調査参加者 佐東南土地改良区理事長 石川安久理

同 副理事長 鈴木 實

同 理事 鈴木 照男

同 理事 鈴木 久雄

同 理事 鈴木 唯一

同 理事 鈴木 辻一

同 理事 森屋 孝道

同 理事 渥美 光雄

同 理事 春田 啓司

同 理事 大橋 稔

同 理事 石川 武夫

同 事務局長 大村 晴郎

同 事務局 綱取 峰平

大東町教育委員会教育長 青野 行雄

同 社会教育課長 川口 功

同 課長補佐 深川 昇

同 社会教育主事 松下 仁

岩滑清水ヶ谷横穴群・岩滑松ヶ谷横穴発掘調査報告書

目 次

序文

例言

1. 調査に至る経緯と調査の目的	1
2. 環 境	2
3. 予備調査	3
4. 発掘調査	3
A. 調査の経過	3
B. 検出された遺構	5
1) 岩滑清水ヶ谷横穴群1号横穴	5
2) 岩滑清水ヶ谷横穴群2号横穴	8
3) 岩滑清水ヶ谷横穴群3号横穴	8
4) 岩滑松ヶ谷横穴	11
C. 出土した遺物	15
5. 考察とまとめ	24
A. 横穴の年代について	24
B. 横穴の基本的な設計について	32
C. ま と め	39

挿図目次

第1図	位置図	1
第2図	周辺環境図	2
第3図	予備調査調査区配置図	3
第4図	清水ヶ谷横穴群環境図	4
第5図	清水ヶ谷横穴群1号横穴実測図	6
第6図	清水ヶ谷横穴群2号横穴実測図	7
第7図	清水ヶ谷横穴群3号横穴実測図	9
第8図	清水ヶ谷横穴群3号横穴遺物出土状態実測図	10
第9図	清水ヶ谷横穴群3号横穴轡出土状態実測図	11
第10図	松ヶ谷横穴環境図	11
第11図	松ヶ谷横穴実測図	12
第12図	松ヶ谷横穴封鎖部実測図	13
第13図	清水ヶ谷横穴群1号横穴出土遺物実測図	15
第14図	清水ヶ谷横穴群3号横穴出土遺物実測図(1)	17
第15図	清水ヶ谷横穴群3号横穴出土遺物実測図(2)	20
第16図	清水ヶ谷横穴群3号横穴出土遺物実測図(3)	21
第17図	松ヶ谷横穴出土遺物実測図	22
第18図	大東町内横穴群出土遺物実測図(1)	27
第19図	大東町内横穴群出土遺物実測図(2)	28
第20図	大東町内横穴群出土遺物実測図(3)	29
第21図	横穴の企画例	32
第22図	横穴規格想定図(1)	33
第23図	横穴規格想定図(2)	34
第24図	横穴規格想定図(3)	36
第25図	横穴規格展開図	37

図版目次

- 図版 I 遺跡遠景写真 1.航空写真 1, 2.航空写真 2
- 図版 II 岩滑清水ヶ谷横穴群 1.遠景 1(南から), 2.遠景 2(東から), 3.調査前景
- 図版 III 岩滑清水ヶ谷横穴群 1.実測調査風景, 2.遺物の水洗選別作業風景, 3.現地説明会風景
- 図版 IV 岩滑清水ヶ谷横穴群 全景
- 図版 V 岩滑清水ヶ谷横穴群 1.1号横穴調査前景, 2.1号横穴全景, 3.1号横穴封鎖状態 1(上から), 4.1号横穴封鎖状態 2(正面から)
- 図版 VI 岩滑清水ヶ谷横穴群 1.1号横穴床面遺物出土状態, 2.1号横穴奥壁ノミ痕状態, 3.2号横穴 調査前景
- 図版 VII 岩滑清水ヶ谷横穴群 1.2号横穴完掘状態, 2.2号横穴墓前域状態
- 図版 VIII 岩滑清水ヶ谷横穴群 1.2号横穴と3号横穴, 2.2号横穴天井部ノミ痕, 3.2号横穴左側壁ノミ痕, 4.2号横穴奥壁ノミ痕
- 図版 IX 岩滑清水ヶ谷横穴群 1.3号横穴開口部状態, 2.3号横穴封鎖状態
- 図版 X 岩滑清水ヶ谷横穴群 1.3号横穴遺物出土状態 1, 2.3号横穴遺物出土状態 2, 3.3号横穴遺 物出土状態 3
- 図版 XI 岩滑清水ヶ谷横穴群 1.3号横穴遺物出土状態 4, 2.3号横穴遺物出土状態 5, 3.3号横穴遺 物出土状態 6, 4.3号横穴玄室内状態
- 図版 XII 岩滑清水ヶ谷横穴群 1.横穴遠景 1(西から), 2.横穴遠景 2(西から), 3.開口部状態
- 図版 XIII 岩滑松ヶ谷横穴 開口部状態
- 図版 XIV 岩滑松ヶ谷横穴 1.玄室内遺物出土状態, 2.墓道状態 1(上面), 3.墓道状態 2(中面)
- 図版 XV 岩滑清水ヶ谷横穴群 出土遺物 1・3号横穴
- 図版 XVI 岩滑清水ヶ谷横穴群 出土遺物 2・3号横穴
- 図版 XVII 岩滑清水ヶ谷横穴群 出土遺物 3・3号横穴, 1号横穴, 松ヶ谷横穴出土鉄鎌

岩滑清水ヶ谷横穴群・岩滑松ヶ谷横穴発掘調査報告書

1. 調査に至る経緯と調査の目的

大東町に存在する横穴は菊川流域横穴群（平野吾郎ほか『遠江の横穴群』 静岡県教育委員会 1983）の一部として確認されているもので、今回調査が実施されたものは佐東川の流域に分布する横穴群の一部で「城山横穴群」として存在が知られているところである。

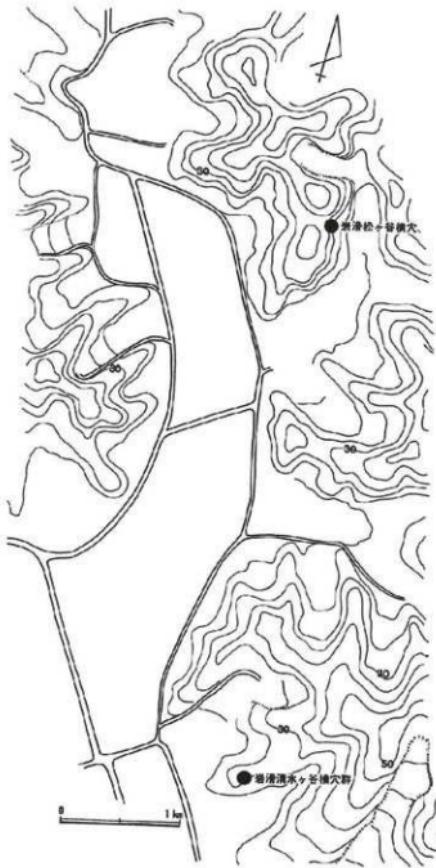
本横穴群は戦時中に開墾された段丘の畠及び茶畠として耕作されていたところであり、佐東地域の茶園造成工事として地区内の山林原野を含めて地区面積76ha、受益面積55.5haの農地造成工事が昭和61年度県営農地開発事業として計画された。

計画時点に於いて、佐東南土地改良区より、町教育委員会に対し、協力方の要請がなされ、計画地域について検討がされた。数度に亘る県文化課、中遠農林事務所、佐東南土地改良区、町教委との協議の結果、清水ヶ谷横穴群については受益区域がどうしても狭くなり、土地改良区に編入しないと事業が成立しないことから、やむを得ず調査箇所とした。また、字名が清水ヶ谷であることから、従来の「城山横穴群」を「清水ヶ谷横穴群」と改称した。

更に八ヶ谷横穴群（平野吾郎ほか『遠江の横穴群』 静岡県教育委員会 1983）については造成地が隣接していることから、横穴群に



第1図 位置図



第2図 周辺環境図

横穴は、丘陵の背から約3mほど下がった東斜面に占地する単独横穴である。群を形成しない点もさることながら、従来の占地地形から外れたあり方は今後の詳細な分布調査の必要性を説いているようである。また、岩滑清水ケ谷横穴群については調査着手前に既に1、2号横穴が開口していたが、3号横穴は同じく分布調査で確認できた横穴である。この横穴群は西に向かって張り出した舌状台地の先端近くに位置し、さらに詳細に地形を観察すると、僅かに独立丘陵状に高まりをみせる箇所の頂部近くの南側斜面に占地している。以上の横穴は共に丘陵の高所にある点に注目したい。

こうした横穴の被葬者層の住居跡等の検出は、今後活発になされる平野部の調査に期待されるところが大であると言えよう。

影響の少ない範囲まで計画区域の変更を要請した。

佐東南土地改良区としては工事面積が広いため、5工区にわけて工事が実施される。当該地は山田工区に属し、62年度よりの工事実施区域となった。

本調査にあたり、山田工区全域にわたる予備調査を県文化課の指導を得て実施し万全を期することとした。

2. 環 境

小笠山塊に当たる佐東の地域には、佐東川に向かって複雑に開析された痩せ尾根の台地とその谷間の小平野が発達している。多くの場合、このような台地の南側斜面には比較的小規模な横穴群が散在しているのが確認されてきている。本横穴群もそうした散在する横穴群の一単位群である。

丘陵を越えて東側には菊川町内の横穴群が、北側には大東町鳥見ヶ谷横穴群20基以上が、隣接する南側の台地には岩滑八ヶ谷横穴群20基以上があって、また佐東川の下流には大規模な毛森山横穴群（消滅）が位置していて、横穴群分布域のひとつの集中域に属していると言えそうだ。今回の発掘調査期間中に遺跡分布調査を行った結果、岩滑八ヶ谷横穴群が占地する台地の先端近くに円墳2基の存在が確実視されるに至った。それらは台地の尾根上に占地し1基は八ヶ谷横穴群側に、他の1基は現在の墓地内の上端にみえる。本横穴群の周囲にも、例えその時期は確定できなくても高塚墳が分布しているのであり、他の横穴群分布地域と同じように横穴と古墳が混在する地域であることがはつきりしてきた。

今回の分布調査で初めて確認された岩滑清水ケ谷

3. 予備調査

調査の結果 横穴確認調査を必要とする6地点 (A~F地点・第3図) が設定された。また遺物の散布地及び古墳等は確認できなかったが、山尾根及び平坦部の確認調査を数箇所 (G~K地点) 設定した。

確認調査の結果 清水ヶ谷地点、宮ヶ谷地点で新たな横穴が確認されたが、他の地点では横穴は確認できなかった。また山尾根及び平坦部での確認調査は2mグリット及びトレンチを設定して実施したが、遺物及び構造は検出されなかった。

清水ヶ谷地点では既に開口していた横穴が2基存在していたが、その西側5m及び20mの山肌を削り岩盤を出して調査した。その結果、開口横穴の東側4mのところで、横穴の墓道部と考えられる幅1.5m、高さ1.8mのV字状断面が検出された。暗褐色土層が安定して堆積していることから、未開口の横穴であることが予想された。

宮ヶ谷地点では丘陵の山頂東側斜面で一部開口した横穴を確認し、その横穴付近は急傾斜地であり安全を確保しながら山肌を10m程削り調査したが他の横穴は確認できなかった。この下の段については調査を実施することはできなかったが、造成工事直前に重機により確認調査を実施することになった。

予備調査の終了にあたり、山の中を共に登り降りして精力的な調査をして下さった佐東地区の方々、そして、社会教育課長、課員の方々に感謝すると共に、今は雑木におおわれた丘陵ごとにいく重にも巡らせてあった段々畑を造った先人の労苦を偲びたいと思う。

4. 発掘調査

A. 調査の経過

1) 岩滑松ヶ谷横穴 (昭和62年7月4日~7月8日)

4日: 発掘調査を開始した。まず墓道部と墓前域の排土から着手し、墓道と開口部の封鎖状態がほぼ確認された。

5日: 墓前域の一部を残してほぼ排土を完了する。玄室内から鉄製品や土師器が出土する。

6日: 仮原点を設定して実測作業に入り、封鎖部を残して完了する。

7日: 玄室内遺物出土状態の写真撮影後取り上げ



第3図 予備調査調査区記置図



確認調査風景

て、封鎖石の実測、除去を開始する。

8日：封鎖石の除去が終了。午後には玄室床面を精査、玉類が出土し追葬を確認した。

2) 岩滑清水ヶ谷横穴群（昭和62年8月6日～16日）

6日：[1号横穴]墓前域の排土に着手。その前端が削平されていることを確認する。

[2号横穴]墓前域を排土して、長大な墓道を確認する。

[3号横穴]墓道部分の排土をおこない、封鎖部が完存し、未盗掘の横穴であると確認する。

7日：[1号横穴]封鎖石の下部が残存していることを確認する。

[2号横穴]墓前域と玄室内を排土。

[3号横穴]墓前域と封鎖部を排土し、封鎖部の写真撮影をする。

8日：[1号横穴]封鎖石の実測を開始し、玄室内の排土に着手する。

[2号横穴]玄室内を精査し、平面実測図を作成。

[3号横穴]封鎖部の実測作業に着手する。

9日：[1号横穴]封鎖部写真撮影。封鎖部の解体。玄室床面から刀子と土師器高环が出土する。

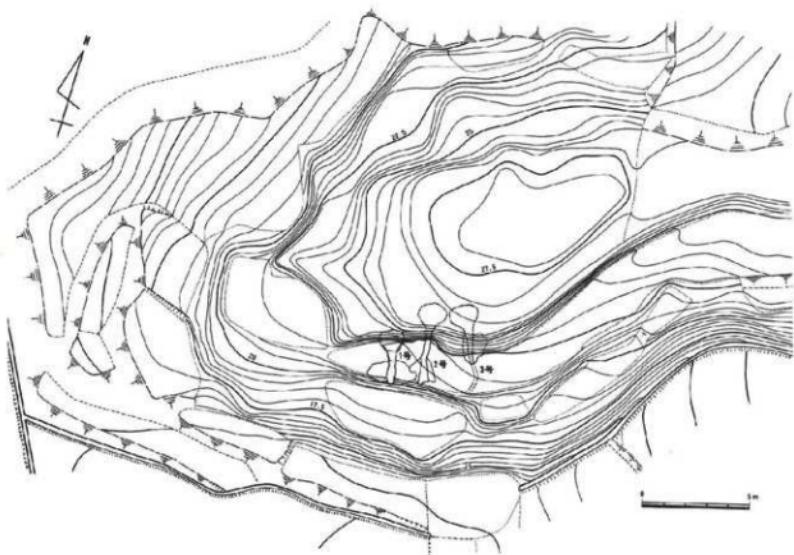
[2号横穴]玄室と墓前域の実測作業を進める。

[3号横穴]封鎖部の解体を実測と平行しておこなう。

10日：[1号横穴]封鎖部の実測を完了する。

[2号横穴]実測作業を進める。

[3号横穴]封鎖部に関わる作業を終了する。玄室内の排土に着手し、須恵器が出土する。



第4図 清水ヶ谷横穴群環境図

- 11日：現地説明会を開催する。
[1号横穴]遺物出土状態写真を撮影し、遺物を取り上げる。
[3号横穴]ベルトコンベアを設置し、大量の玄室内埋土を排土する。
- 12日：[1号横穴]墓前域の実測作業をおこなう。
[3号横穴]玄室内の排土作業を進め、礫床を確認し、馬具や玉類が出土する。
- 13日：全体写真を撮影する。床面覆土の水洗選別にかかる。
[1号横穴]実測図を補足する。
[2号横穴]補足調査。
[3号横穴]玄室内遺物出土状態実測図を作成。墓前域の実測をおこなう。
- 14日：[1号横穴]玄室壁面の工具痕調査。
[3号横穴]玄室実測図を作成。
- 15日：[1号横穴]調査完了。
[2号横穴]調査完了。
[3号横穴]実測図の補足作業。
- 16日：[3号横穴]墓道の延長部を確認して、調査を完了する。

B. 検出された遺構

1) 1号横穴

調査着手時の状態 今回発掘調査された3基の横穴のうち本横穴は、佐東川に向けて開析された小支谷の入口に位置する。また、他の2基よりも低いレベルに開口していて、開口部床面は海拔約20mに位置する。

本横穴は、開墾によって天井部及び墓前域の一部が削平され、遺構の残存状態は良好とはいえない。調査着手時には、床面には天井部から流入したと思われる土砂が20cm～30cm堆積し、奥壁面にはその時のツルハシの痕跡が認められた。

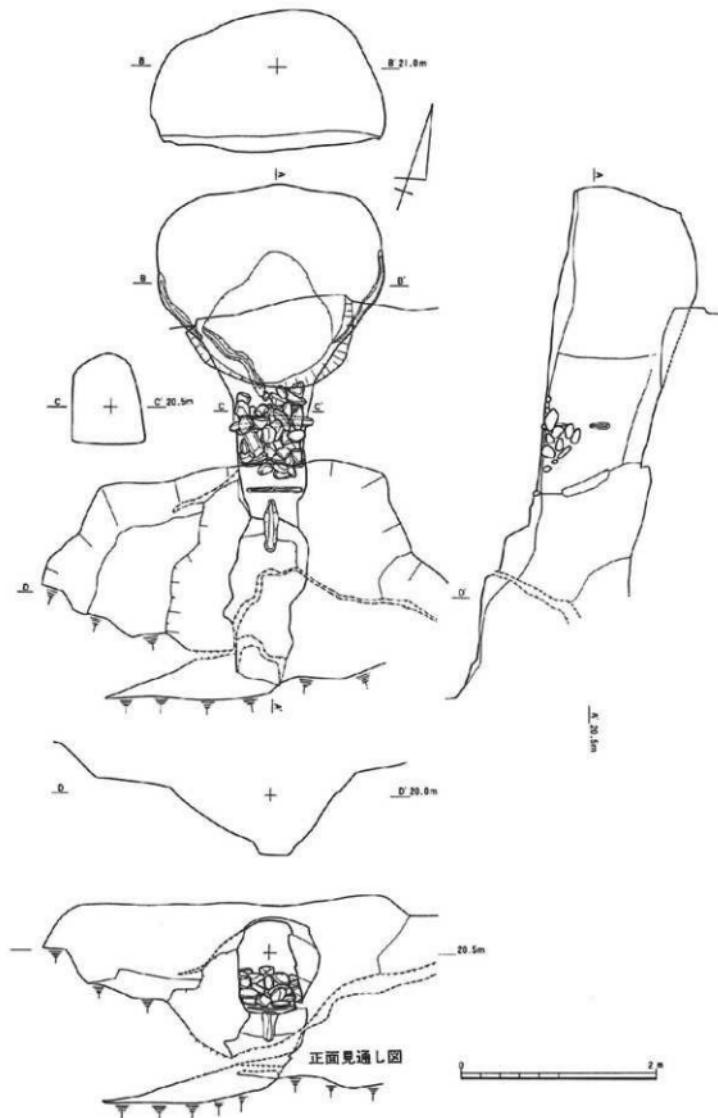
玄室・羨導部 本横穴の主軸はN-14°-Wを指す。玄室の平面形はフラスコ形をなし、長軸長2.41m、短軸長2.32m、玄室の最大高は1.41mを測る。また横断面形は蒲鉾形を呈し、天井と側壁の境界は不明瞭である。床面のレベルは奥壁と開口部で6cm程の落差を有する。さらに開口部近くの両側に幅10～20cm、深さ3cmほどの排水溝が設けられている。

羨道部は長さ0.59m、幅0.71mを測る。天井部と側壁との境は明瞭であり、東側壁で高さ0.82m、西側壁0.75mを測る。東壁は内傾し、天井部はアーチ状である。また羨道部断面形は総じて歪んだ台形をなす。開口部と玄門部は主軸に直交する幅13cm、深さ4cm及び幅25cm、深さ1～5cmの溝がそれぞれ掘られ、玄室と墓前域を区画する。さらに玄門部側では、さきの溝に併せて両側の壁が13cm程掘り込まれており、板のような物で仕切られた可能性がある。これと類似した区画施設を菊川町東平尾横穴群橋本ヶ谷支群3号横穴に見ることができる。

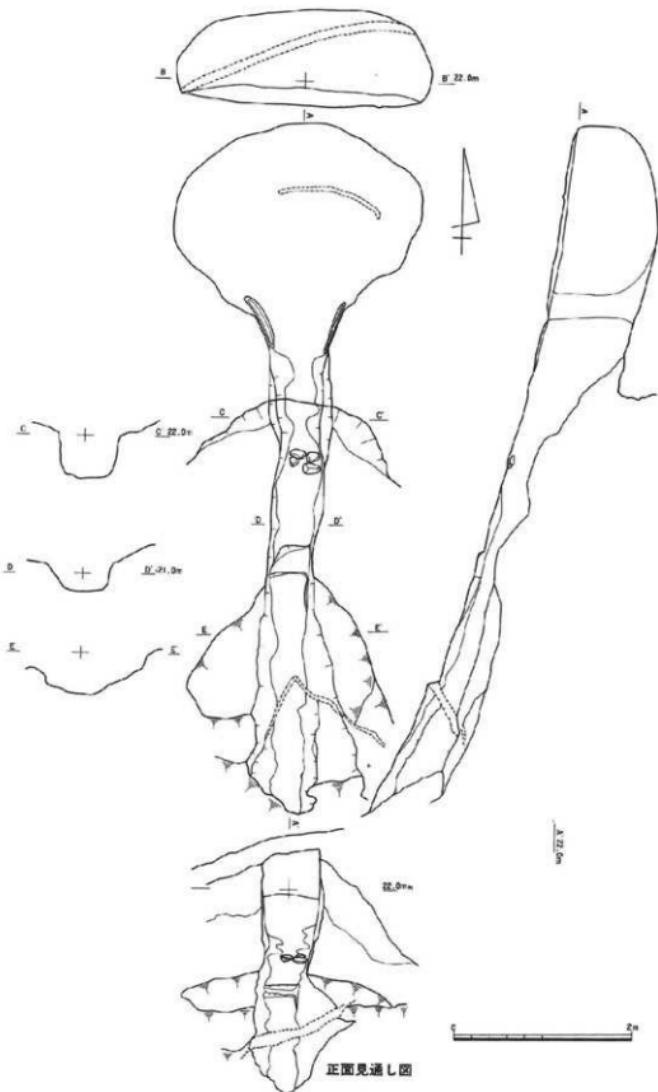
工具痕の観察 玄室左側壁の天井近くと羨道左側壁に、仕上げに用いられた幅12cmを測るU字形鍛先の跡が観察された。また天井部には幅2.0～2.2cmを測る手斧の打ち込みの痕跡が見えた。

墓前域 墓前域は前述のごとく末端を欠くが台形に広がり玄室側で一辺2.88m、残存部で長さ2.34mを測る。墓前域の壁は緩やかに傾斜して墓道に達するが、西側では途中0.6m×0.4mの平坦部を持つ。

墓道は50～70cmの幅で若干西に偏して延び、途中2箇所に段を持つ。また第2段目付近に主軸に平行して、幅30cm、深さ3cmの溝があるが、その長さは0.55mほどを測る。排水溝とも思われず、その性格は不明である。



第5図 清水ヶ谷横穴群1号横穴実測図



第6図 清水ヶ谷横穴群2号横穴実測図

封鎖部 開口部は石積みによって封鎖されていたが、基底部にあたる2～3段が残存しているに過ぎなかった。封鎖に使用された石材は横長の円碟が主体となる。封鎖の手順は第1段に円碟を主軸に平行して並べ、第2段には主軸に直行して置き、これを交互に積んだと考えられる。第1段の封鎖石の最前列の石は、開口部の溝に沿って置かれていた。

出土遺物 本横穴からは第13図に示した刀子1点、須恵器环身1点、土師器高环2点が出土した。刀子は玄室床面のほぼ中央から出土し、この玄門部側の床面から須恵器环身が、また刀子の奥壁寄りから土師器高环2点が出土した。そしてこれらの土器と比較して、既に採集されて公民館に保管されていた須恵器蓋と今回の須恵器环身がセットとなり、土師器高环が本横穴出土例と形態・焼成が一致することから、本横穴に納められた遺物であることが判明した。

2) 2号横穴

調査着手時の状態 本横穴は、3基の横穴のうち中央に位置し、開口部のレベルも中位に位置している。

本横穴は、開墾によって開口部と墓前域が削平されていたものの、玄室内は倉庫に使われていたが、残存状態は良好であった。従って、調査着手時には、玄室内への土砂の流入は少なく、墓道も床面が残存している程度であった。

玄室・羨導部 本横穴の主軸はN-5°-Wをとる。玄室の平面形はラスコ形をなし、長軸長2.79m、短軸長2.11m、玄室の最大高は1.10mを測る。また横断面形は蒲鉾形を呈し、天井と側壁の境界は不明瞭である。床面から40cm上方の側壁が膨らみ、床面のレベルは奥壁と開口部で25cm程が認められ、比較的急な傾斜を有する。

墓道に残存する封鎖石の玄室側が墓道幅を減じていて、また開口部から奥壁に向かって長さ1m入ったあたりがその玄室側壁線の屈曲から羨導部と認めてよく、長さは1.55mを測る。そしてこの羨導部の玄室側には幅10cm程の排水溝が両壁に沿って設けられている。

工具痕の観察 玄室奥壁と床面の奥半部分には幅1.5cmを測る打ち込みの手斧の痕跡が見え、天井部の右側壁近くにはこの粗採り後にU字形鎌先を使って仕上げが施されたことが分かる。また左玄門部を見ると、玄門稜線の両側には奥に向かって斜めに下がる手斧の痕跡が、さらに同天井部には開口部から奥に向かっての手斧の痕跡が見えた。共に幅3.2cmを測る。

墓前域 墓前域は前端を欠いていて残存長4.12mを計測するが、その長さははっきりと計測できない。八の字状に前方が開き、墓前域の形態はその長大な墓道からも3号横穴のそれに類似していたと考えている。さらに墓前域の右前端部は1号横穴によって削平されている。

墓道は50～60cmの幅で直線的に延び、途中2箇所にクラックによる段差を持つ。

封鎖部 開口部に想定した部分に、4点の河原石が床面に接して残されていた。

出土遺物 本横穴から遺物の出土はなかった。

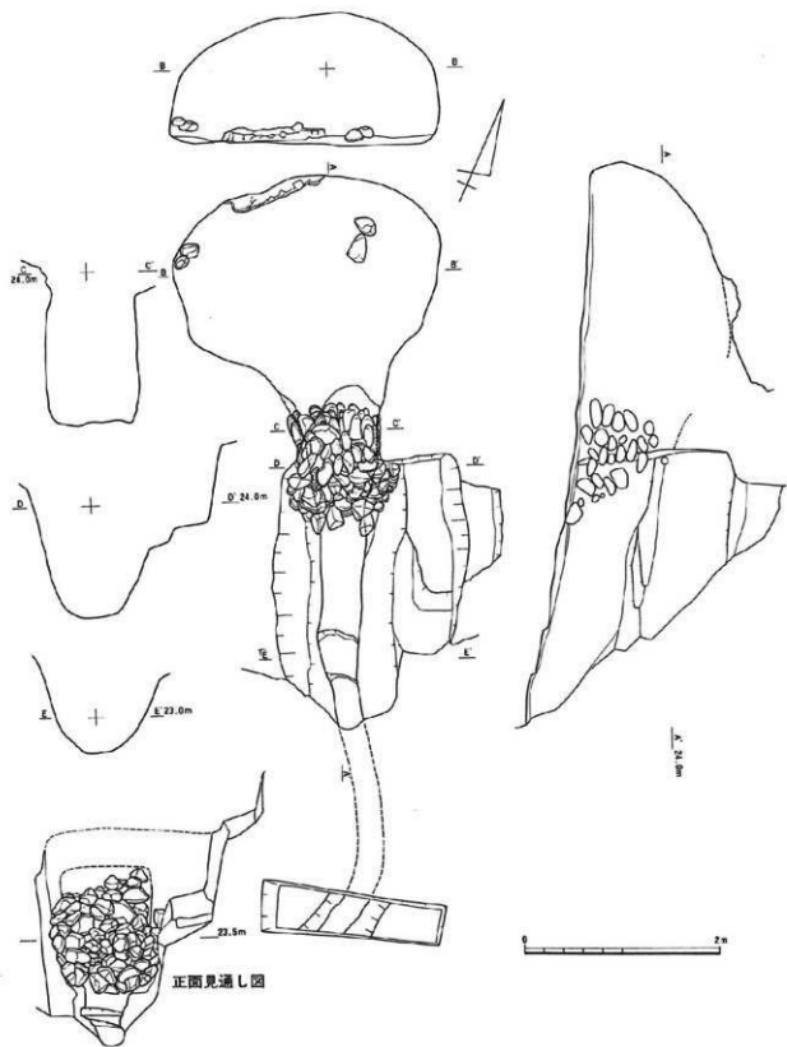
3) 3号横穴

調査着手時の状態 本横穴は未開口の横穴であり、確認調査で発見されるまではその存在が知られていなかった。3基の横穴のうち谷奥側に位置し、開口部のレベルも最も高い位置にある。

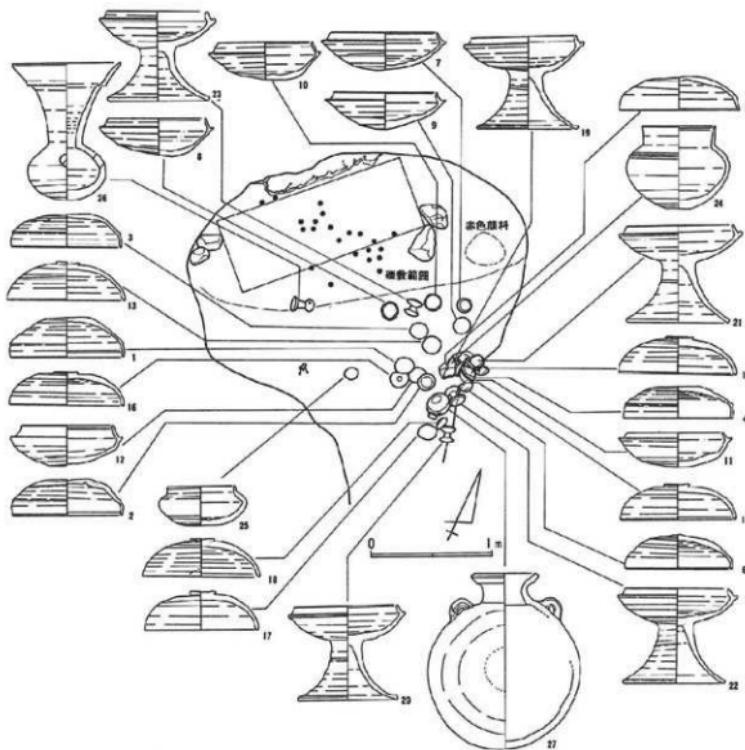
本横穴は、開墾によって墓道の中間部が削平されていたものの、封鎖部と玄室は完存していた。ただ封鎖部内側の天井がひび割れしていて調査中に崩落し、その形態を理解することはできなかった。

調査着手時には、玄室内への土砂の流入は少なく、玄室の土器の一部は頭を覗かせていた。

玄室・羨導部 本横穴の主軸はN-21°-Wをとる。玄室の平面形はラスコ形を呈し、長軸長2.76m、



第7図 清水ヶ谷横穴群3号横穴実測図



第8図 清水ヶ谷横穴群3号横穴遺物出土状態実測図

短軸長1.98m、玄室の最大高は1.37mを測る。また横断面形は蒲鉾形を呈し、天井と側壁の境界は不明瞭である。床面のレベルは奥壁と開口部で30cm程が認められ、玄室内での床面傾斜は一旦玄門部で平坦になって墓道に連絡する。

玄室の内部は、全面が粘性の高い黄褐色土で貼床されていたが、第8図に示したように、特に奥半部は直径2cm程に至らない小碟とベンガラと思われる赤色顔料で貼られていた。また、奥壁の右半には高さ10cm程の壇状の壇をつくり、奥壁に接して床から16cm浮いて2点の河原石が、また玄室左半の中程にも2点の河原石が据えられていた。これは床面から浮いていることから棺座石ではなく、棺支え石であり、奥壁の壇状のつくりだしを棺の側面において第8図のように木棺の位置を推定した。

墓道部は長さ1.02mを測る。そして墓道部左壁に接して幅10cm程、長さ40cmの排水溝が設けられている。

工具痕の観察 輪ははっきりしないが打ち込みの手斧の痕跡が左側壁に見え、その後を天井から放射状に下がるU字形歫先を使っての仕上げが施されている。また左側壁の中程には左下がり（開口部から奥へ向かって下がる）のU字形歫先を使っての仕上げも観察された。

墓前城 墓前城は前端を欠いていて残存長2.74m、幅2.04mを計測する。その長さは前端が削平されているためはつきりしないが、せりだした山の部分だけが雑壇を有する墓前城に切り通し状に整えられていたと考えられる。そして墓前城の左壁だけを雑壇状に造っていることは、西にカーブしながら連結している墓道からの視線を意識しての所作であると考えられる。また墓道は、恐らく2号横穴の前面で1、2号横穴の墓道と集合していたと想像している。

墓道は開口部で床面幅72cm、墓前城前端で24cmを測り、直線的に延び、途中2箇所に階段を造っている。

封鎖部 河原石を据が広がるように積んだ封鎖石が完存していた。開口部を頂点とし、床面での長さ1.36m、高さ90cm程度の範囲に積まれて、石は小口積みを原則とし、石だけを用いて、しかも隙間なく積んでいた。

出土遺物 本横穴からは須恵器27点と、勾玉、管玉、切子玉、ガラス小玉の玉類及び轡等の鉄製品が出土している。これらの出土状態を第8図に示した。

須恵器：左玄門部付近から出土した一群については図版でも確認できるように、入れ子状態のものがみられる事、全ての須恵器が床面から浮いて出土し、その浮き方は開口部方向が高く、奥壁方向が低くなっている事から、棺の上に片付けられていたと推定される。また轡については棺に隣接して置かれていた事が分かる。

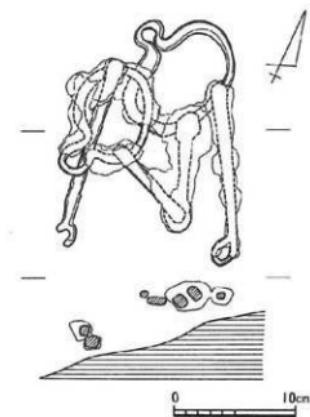
玉類：原位置を保って出土したものは少なく、貼り床土の水洗選別によって得られたものが多い。それでも出土位置は、推定可能な棺の軸方向とは異なる方向に延びていることが分かる。従ってこれは棺の配置が違っている可能性を残していると言えよう。ただ、そのように考えてもその出土範囲は広く単に頭飾りだけに玉が結び付けられていたと考えるだけでは不十分であろう。

轡：右玄門部付近の床面から出土している。

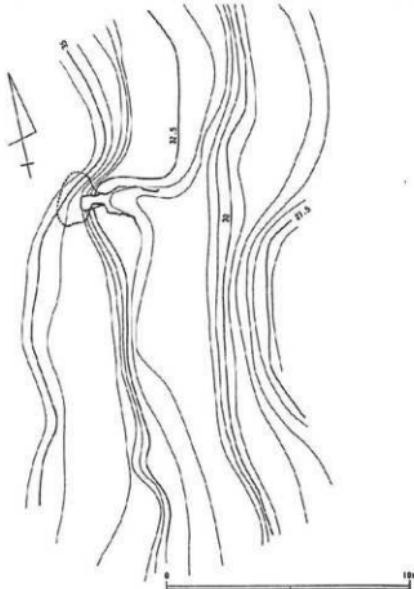
鉄製品：小さな棒状の鉄製品や環状の鉄製品があるが、共に水洗選別で得られた遺物であり、その出土位置は不明である。

4) 岩滑松ヶ谷横穴

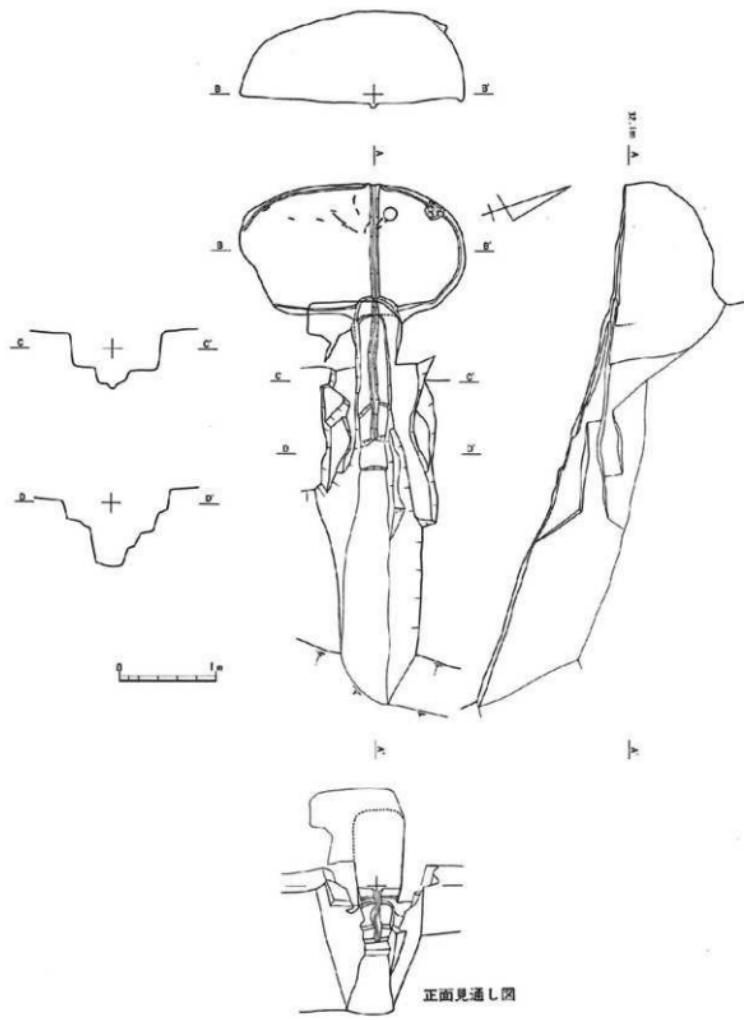
調査着手時の状態 本横穴は既に開口していて、開口部が最大幅1mを測るほどに拡張されていた。開口部上端から下約40cmの部分まで土が流入しており、玄室内もほぼ同じレベルまで埋没していた。また、墓前域は畠



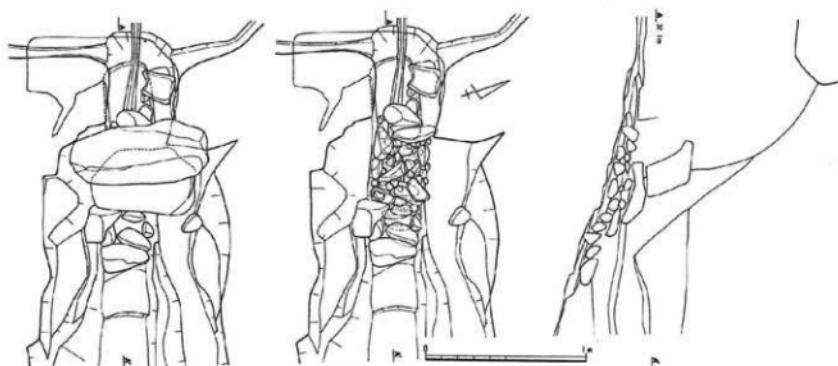
第9図
清水ヶ谷横穴群3号横穴出土状況実測図



第10図 松ヶ谷横穴環境図



第11図 松ヶ谷横穴実測図



第12図 松ヶ谷横穴封鎖部実測図

地として利用されていたためその上部は開口部に及んで削平され、完全に埋没していた。

玄室・羨道部 本横穴は主軸方向をN-72.5°-Wにとる。玄室平面形は、墓道の主軸方向に対して玄室の長軸が斜交する楕円形を呈し、床面で短軸長1.17m、長軸長2.32mを測る。立面形はドーム形で、天井部と壁面の境界は不明瞭である。玄室最大高は98cmを測る。奥壁は直立するのではなく、僅かに膨張して凹面を呈する。また奥壁の右半は不整形で、この部分で床面が突出している。

床面には、横穴の主軸に沿って幅8cmの排水溝が一直線に掘られており、墓前域にまで連続している。さらに、この溝と奥壁の接点の両側から玄門部の落ち込みまで周溝が巡る。しかし、右側壁の開口部寄りでは周溝が一部途切れるが、この部分の床面が比較的低くなっているため排水の機能に支障はきたさないものと思われる。

床面は2面の貼床からなる。両側壁と開口部沿いの床の一部を除いて、礫混じりの黒褐色土を4~7cmの厚さに貼って床面を形成している。この床は、径2~4cmの円礫を含む上層と、径1cm前後の円礫を多く含む下層とに分層できる。この追葬時の貼床は、礫の隙間に木炭粒や焼土粒を含む粘性の強い暗褐色土が埋めていた。この床面から土器と鉄製品が出土している。また初葬時の床面は小円礫の間を上層よりも更に粘性が強い黒色土が埋め、この貼床の下方からガラス玉が出土している。

また玄門部では、羨道部の床面が玄室に及び、略半円形に掘り込まれて、5cmの段差が形成されている。前述の排水溝は全て一段低いこの部分に連結している。

羨道部は床面での最大幅45cm、長さ55cmを測るが、天井部から右側壁にかけての部分が大きく削られており、開口部の高さと形態が不明である。なお開口部においては段差等の区画施設はみられない。

工具痕の観察 玄室左側壁の開口部近くに連続した手斧痕を、また開口部段差の立面に手斧痕を認めた。しかし天井部の工具痕は観察できなかった。

墓前域 墓前域は、長さ1.7m・幅1.1mの長方形の平面プランであるが、上方が削平されているため本来の墓前域の高さを復元することは不可能であった。おそらく当初、等高線に沿って横穴に達する墓道が存在し、ほぼ直角に折れていたと想像している。

墓前域の両壁は不規則ながら、3段の雑段状を呈していて、最下部が墓道・排水溝になっている。また、開口部直下では封鎖石を落とし込むために両側の段が剥り取られている。

墓道は幅30cmを測り、3段の階段をなすが、幅をやや広げながら墓前域の入口に達する。開口部から長さ3.3mを測る。玄室・羨道から延びてきた排水溝は2番目の段で終わっている。そして墓道の傾斜

角はほぼ17°を作っている。本横穴の墓前域の特色は幅が狭く、しかもその高さが高い「切り通し」に近い形態にある。あるいはこれを未発達な墓前域、または立派な墓道と表現した方がよいかも知れない。いずれにしても、いくつかの6世紀代の横穴に共通した形態であると言えそうである。

封鎖部 本横穴では封鎖の石積みの下半部が残存していた。封鎖方法を以下に復元してみよう。まず開口部から墓道の2段目にかけての範囲に長さ25cm前後の横長の円碟を、横穴の主軸に対して直角に並べる。そして、開口部側の半分の範囲ではこの石積みを2層にして、間際に円碟を充填した後、その上に長軸70cm・厚さ8cmの板石を水平に置く。さらにこの上に幅90cm・厚さ20cmの板石を、開口部に立て掛けるようにして置いている。この板石の上半部は既に折損していた。これら2枚の板石は、本横穴が掘り込まれている地山砂岩を堆積層に沿って剝離、整形したものである。また円碟は全て河原石である。板石の開口部側下部に僅かに暗黄褐色土の存在が確認できたが、これが封鎖石の裏込めかどうかは不明である。少なくとも円碟を積み上げた部分は排水を考慮したものであって、充填材等の使用は無かったものと思われる。

出土遺物 遺物は、玄室・墓道・封鎖施設内及び墓道前端から出土している。

玄室では、まず奥壁東寄りの壁際で土師器球胴甕が1点、さらに中央や北東寄りで土師器環1点が検出された。後者は、追葬時の床材に完全に埋没していたため、初葬時のものと考えられる。この他、鉄鎌・刀子が北西寄りで集中して検出され、玄門部近くでは初葬時と思われる、ガラス小玉が十数点発見された。玄室内の遺物の出土位置から、遺体は中央よりやや南寄りに安置されたものと思われる。特にガラス小玉の位置により、初葬時には、頭部を東に向むけた可能性が指摘できる。

墓道部床面直上と、封鎖の円碟間からは碧玉製管玉が7点検出された。また、墓道末端の東側崖面で須恵器環が1点検出されている。恐らく、追葬時に外に片付けられたものと思われる。

C. 出土した遺物

1) 岩滑清水ヶ谷横穴群1号横穴出土遺物

7世紀後半の須恵器蓋杯と土師器高杯及び鉄製刀子が出土している。遺物の組合せから考えて追葬はなかったと思われる。尚、1と5は、開墾に際して本横穴が破壊された時に、持ち出されて北公民館に所蔵されていた遺物で、出土地不詳となっていた資料である。今回の調査でこれを確定することができた。

a) 須恵器 (第13図)

1. 壺蓋: 口径7.6cm×器高3.8cm×最大径

9.8cm。身受け部を垂下させ爪形に仕上げる。器壁は厚く、頂部に乳頭状のツマミを付す。頂部外面は右回転のヘラケズリされ、全面にわたって丁寧にナデ調整される。胎土は砂粒と白色粒子を含み密で、焼成は良好、灰色を呈する。外面全体に自然釉がかかっている。

2. 壺身: 口径9.0cm×器高4.3cm。

口縁部は僅かに外反し、底部と体部の境で強く屈曲する。丸く作られた底部の器壁は厚く、底部外面は右回転のヘラケズリされ、体部外面には弱いノタ目が残されている。胎土は長石粒と砂粒を含み、焼成は良好、暗灰色を呈する。

b) 土師器

3. 無蓋高杯: 口径10.2cm×器高7.5cm×脚部径7.1cm。

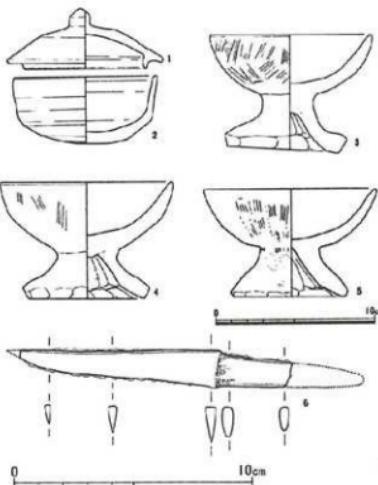
器部の器形を丸く、口縁端部を薄くする、粗雑なつくりの高杯である。杯部の外面はハケ調整、内面はナデ調整される。脚部は端部を肥厚させ、その端部外面と脚部の内面をヘラケズリして仕上げる。胎土は砂粒を含みやや粗で、焼成は不良、橙色を呈する。

4. 無蓋高杯: 口径10.8cm×器高7.4cm×脚部径7.3cm。

器部の器形を丸く、口縁部と体部の境で僅かに屈曲する、粗雑なつくりの高杯である。杯部の外面は、器面が荒れていて細かな観察は不可能であるが、ハケ調整で、内面はナデ調整される。脚部は端部を肥厚させ、その端部外面と脚部の内面をヘラケズリして仕上げる。胎土は砂粒を含み粗で、焼成は不良、黄褐色を呈する。

5. 無蓋高杯: 口径11.0cm×器高6.8cm×脚部径6.9cm。

器部の器形はゆるやかに丸く立ち上がる、粗雑なつくりの高杯である。杯部の外面は、ハケ調整後ナデ調整され、内面と口縁端部はナデ調整される。脚部は内面の半ばでケズリによって屈曲し、また端部外面と脚部の内面をヘラケズリして仕上げる。胎土は砂粒と赤色粒子を含み粗で、焼成は不良、黄褐色を呈する。脚部の一部を欠損する。



第13図 清水ヶ谷横穴群1号横穴出土遺物実測図

c) 鉄製品（第13図）

6. 刀子：残存長11.2cmを測る平棟棟関造りの刀子で、関部で幅1.6cmを測る。茎部には僅かに木質が残り、茎部の断面は丸味を帯びている。

2) 岩滑清水ヶ谷横穴群3号横穴出土遺物

遺物からも追葬は無いと考えられ、良好なセット関係を示す6世紀後半代の須恵器、及び鉄製轡1個体と多量の玉類が出土している。

a) 須恵器（第14・15図）

1. 坂蓋：口径13.6cm×器高4.9cm。

口縁部と体部の境に突帯状の稜を作る。口縁部の半ばを屈曲させ、その端部を下方に引き出している。頂部を平坦にするために右回転のヘラケズリを行って、体部の内外面には弱いノタ目を残している。また頂部の内面には布の圧痕が観察される。胎土は砂粒と黒色粒子を含み密で、焼成は良好、灰色を呈する。

2. 坂蓋：口径13.2cm×器高4.5cm。

口縁部を緩やかに屈曲させ、その端部を外反させて、丁寧にナデ調整を加える。口縁部と体部の境に明瞭な稜を作り、平坦な頂部は回転ヘラケズリされている。またこの頂部は、ロクロから土器を切り離す際に深く切りすぎて穴を開けてしまったため、ここを粘土で詰めて補修（貼付補修）している。頂部の外面にはヘラケズリ調整後の乾燥時に付いたスノコの痕跡が見え、内面には一方のナデの痕跡がある。ロクロとヘラケズリの方向は右回転で、外面にはノタ目を残しているが、内面はそれを消している。胎土は微細砂粒を含み緻密で、焼成は良好、灰色を呈する。

3. 坂蓋：口径13.3cm×器高4.2cm。

口縁部がわずかに屈曲し、口縁部と体部の境に強い稜を作る。頂部は右回転ヘラケズリで平坦化し、内外面に弱いノタ目を残している。胎土は長石粒と砂粒を少量含み、焼成は良好で、青灰色を呈する。

4. 坂蓋：口径13.0cm×器高4.0cm。

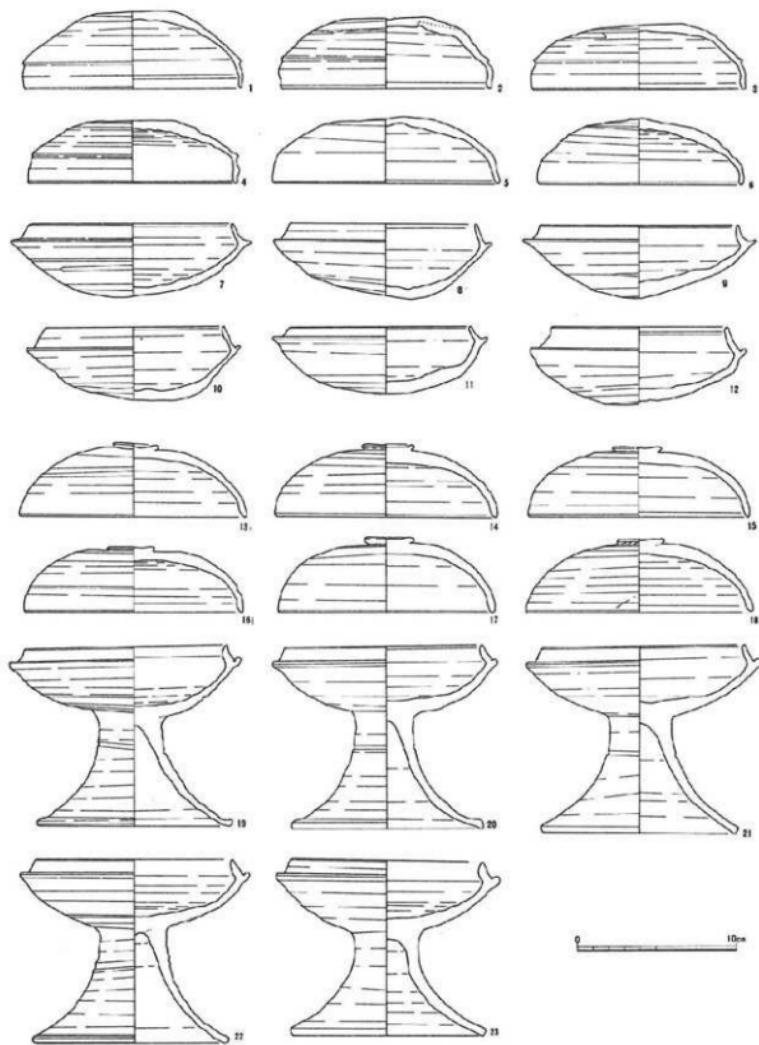
口縁部と体部の境に強い稜を作り、ここで強く屈曲する。頂部外面は右回転のヘラケズリで平坦化され、その内面には指頭による押さえが見える。体部から口縁部にかけての内外面は丁寧なナデ調整が施されているが、頂部の内面には強いノタ目が残されている。胎土は若干の砂粒を含み緻密で、焼成は良好、青灰色を呈する。

5. 坂蓋：口径14.3cm×器高4.2cm。

口縁部と体部の境には稜を作らず、緩やかに湾曲した頂部と体部はここで屈曲して口縁部は外反する。頂部外面は右回転のヘラケズリ、内面には強いノタ目が残されている。口縁部の端部と外面は丁寧なナデ調整されている。胎土は長石粒と粗大な砂粒を含み密で、焼成は良好、青灰色を呈する。

6. 坂蓋：口径12.6cm×器高4.2cm。

口縁部と体部の境は不明瞭で、頂部からゆるやかに内湾して口縁部に至る。頂部から体部の半ばにかけてに2回にわたって左回転ヘラケズリがなされ、体部にかけての内外面にはノタ目が残り、口縁部の内外面は丁寧なナデ調整が施されている。ロクロ回転は左回転。胎土は粗大な長石粒・砂粒を含みやや粗で、焼成は良好、灰色を呈する。



第14図 清水ヶ谷横穴群3号横穴出土遺物実測図(1)

7. 坯身：口径13.0cm×器高4.0cm×最大径15.2cm。
内傾する口縁部と断面三角形の蓋受け部を有し、丸底を呈する。底部は、回転ヘラケズリされ、内外面には弱いタ目が残されている。胎土は粗大な砂粒と長石粒を含み、焼成は良好で、青灰色を呈する。
8. 坯身：口径12.4cm×器高5.6cm×最大径14.6cm。
口縁部は蓋受け部で強く外反し、口縁部から蓋受け部の外面は丁寧にナデ調整され、その境は明瞭化されない。丸く作られた底部の器壁は厚く、外面は右回転のヘラケズリがなされ、内外面にはノタ目が残されている。胎土は粗大な長石粒を含み密で、焼成は良好、青灰色を呈する。
9. 坯身：口径11.8cm×器高4.8cm×最大径13.9cm。
口縁端部は肥厚し、内傾して幅広である。断面三角形の蓋受け部を有し、その上面は丸く、口縁部との境に工具で押さえて沈線を設けている。底部は回転のヘラケズリがなされ、平坦化され、内外面にはノタ目が残されている。胎土は長石粒と砂粒を含み密で、焼成は良好、青灰色を呈する。
10. 坯身：口径11.3cm×器高4.6cm×最大径13.5cm。
口縁部は肥厚し、端部を直立気味につくる。受け部には縁部との境に工具で押さえて境を明瞭にする。体部の器壁は薄く、底部は右回転ヘラケズリされ、外面にはノタ目が残されている。胎土は長石粒と砂粒を含み密で、焼成は良好、青灰色を呈する。
11. 坯身：口径11.3cm×器高4.6cm×最大径13.5cm。
内傾する口縁部と断面方形につくった蓋受け部は、境を明瞭にする。器壁は厚く、丸底を呈する。底部は回転ヘラケズリされ、内外面にはノタ目が残されている。胎土は長石粒と砂粒を含み、焼成は良好、青灰色を呈する。
12. 坯身：口径11.1cm×器高4.9cm×最大径14.4cm。
外反気味に立ち上がる口縁部を有し、玉縁化された端部の内側に沈線化した押さえを見る。また端部を玉縁化した蓋受け部は、上面で口縁部との境は明瞭化されている。底部の外面は左回転のヘラケズリがなされ、平坦に作られている。その中心部分にはヘラキリ痕が残っていて、ロクロを右回転させてながら切り離したことが判る。整形ロクロは左回転で、内面は丁寧にナデ調整されている。さらに、底部の内面には指頭押さえが見えて、体部外面にはノタ目が弱く残っている。胎土は砂粒と石粒を含み密で、焼成は良好、青灰色を呈する。
13. 有蓋高坏蓋：口径14.3cm×器高4.7cm。
体部を丸くつくり、口縁部をわずかに外反気味に整える。頂部の中央に偏平なボタン状のつまみを付す。頂部外面は、右回転ヘラケズリされ、内外面共に弱いノタ目が残されている。胎土は小砂粒と赤色粒子を含み、焼成は良好、灰色を呈する。
14. 有蓋高坏蓋：口径13.9cm×器高4.6cm。
体部から口縁部を丸くつくり、口縁端部と頂部は器壁が厚い。頂部に中央が凹んでいる偏平なボタン状のつまみを付す。頂部外面は、回転ヘラケズリされ、内外面共にナデ調整されてノタ目が消されている。特に口縁部がナデ整形されている。胎土は砂粒と赤色粒子を含み、焼成は良好、灰色を呈する。
15. 有蓋高坏蓋：口径13.8cm×器高4.5cm。
頂部の中央を偏平につくり、体部から口縁部を丸くおさめる。口縁端部をつまみ出して薄

く仕上げる。中央が凹んでいる偏平なボタン状のつまみを付す。頂部外面は左回転ヘラケズリされ、体部の内外面共に弱いノタ目が残されている。胎土は小砂粒と赤色粒子を含み、焼成は良好、灰色を呈する。

16. 有蓋高坏蓋：口径13.7cm×器高4.1cm。

頂部を平坦につくる。体部と口縁部の境を強く押さえることで口縁部を屈曲させて、さらに端部を内湾気味に仕上げ、弱い稜を作り出している。頂部に平坦なボタン状のつまみを付す。頂部外面は右回転ヘラケズリされ、体部を内外面共にノタ目が残されている。胎土は小砂粒と赤色粒子を含み、焼成は良好、青灰色を呈する。

17. 有蓋高坏蓋：口径13.6cm×器高4.7cm。

頂部中央付近を平坦につくり、体部を丸くつくる。頂部に上面がくぼんだボタン状のつまみを付す。頂部外面は右回転ヘラケズリされ、内外面共に丁寧にナデられ、ノタ目が消されている。胎土は小砂粒と赤色粒子を含み、焼成は良好、灰色を呈する。

18. 有蓋高坏蓋：口径14.2cm×器高4.6cm。

口縁端部を厚く、その端部を屈曲させ直立気味につくる。頂部に偏平なボタン状のつまみを付す。頂部外面は右回転ヘラケズリされ、ロクロの回転方向は右で、体部には弱いノタ目が残されている。口縁端部と頂部内面を丁寧にナデ調整、頂部の内面中央に指頭による押さえを見る。胎土は若干の砂粒を含み密で、焼成は良好、明灰色を呈する。

19. 有蓋高坏：口径12.7cm×器高11.2cm×最大径14.6cm×脚部径12.0cm。

环部の器形を丸く、口縁端部を薄くつくる。蓋受け部は端部を玉縁化し、上面に口縁部との境を工具で押さえて境の区画を明瞭にする。环部底部は丸くつくられ、その器壁は比較的厚く、底部外面は左回転のヘラケズリが加えられている。环部のロクロは左回転。体部の外面と底部の内面にはノタ目を残している。环部底部内面の中央に指頭による押さえを見る。脚部はラッパ状に大きく開き、その端部を肥厚させている。ロクロ方向は左回転。この上方に一条の沈線を巡らせ、外面にはノタ目が残されているが、内面は丁寧にナデ調整がなされている。胎土は砂粒を含み密で、焼成は良好、灰色を呈する。

20. 有蓋高坏：口径12.5cm×器高11.5cm×最大径14.3cm×脚部径12.1cm。

口縁部は蓋受け部との境で屈曲して内傾する。蓋受け部は端部を玉縁化し、同時に口縁部との境を押さえて区画している。环部は丸くつくられ、回転ヘラケズリされた底部を含めて、丁寧にナデ調整されている。脚部はラッパ状に開き、その端部を断面三角形に肥厚させている。この上方に一条の沈線を巡らせている。胎土は小砂粒と赤色粒子を含み、焼成は良好、灰色を呈する。

21. 有蓋高坏：口径12.8cm×器高11.9cm×最大径14.8cm×脚部径12.0cm。

口縁部は強くナデられ、蓋受け部の先端部を玉縁化している。环部の内外面を丁寧にナデ調整し、脚部の上方に一条の沈線を巡らせ、脚部の先端を肥厚させることなくまとめている。胎土は長石粒と赤色粒子を含み、焼成は良好、青灰色を呈する。

22. 有蓋高坏：口径12.5cm×器高11.5cm×最大径14.5cm×脚部径12.2cm。

内傾する口縁部は肥厚し、蓋受け部は端部を玉縁化している。环部の体部を丸くつくり、その外面は広い範囲にわたって右回転のヘラケズリが観察される。环部のロクロは右回転。また环部の内面の調整は、上半にはノタ目を残し、下半はそれがナデ消しされている。环部底部内面の中央に指頭による押さえを見る。脚部はラッパ状に開き、その端部を強くナデしている。この上方に一条の沈線を巡らせ、内面は丁寧にナデ調整がなされている。胎土

は砂粒を含み緻密で、焼成は良好、明灰色を呈する。

23. 有蓋高环壺：口径11.1cm×器高11.1cm×最大径13.2cm×脚部径12.1cm。

口縁部の器壁は厚く、蓋受け部は端部を玉縁化し、口縁部との境を押さえて区画をつくっている。環部の器壁は比較的厚く、内外面に弱くノタ目を残している。脚部の先端部を断面方形にまとめて、上方に沈線を巡らしていない。胎土は砂粒と長石粒を含み、焼成は良好、灰色を呈する。

24. 短頸壺：口径8.1cm×器高4.8cm×最大径10.6cm。

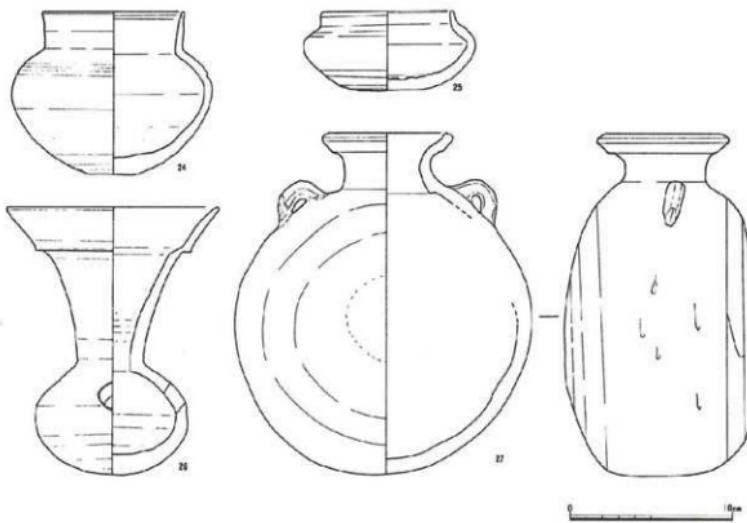
直立する口縁部を有する平底の短頸壺で、体部は中程の最大径部で大きく膨らみ屈曲する。体部は下半から底部を回転ヘラケズリし、最大径部を丁寧にナデ調整し、肩部にはノタ目が残っている。内面も丁寧なナデ調整が行われているが、底部にはノタ目が残っている。ロクロ・回転ヘラケズリ共左回転。肩部から口縁部の外面には自然釉が付着しておらず、蓋を乗せて焼成されたことが分かる。胎土は長石粒を多く含み緻密で、焼成は良好、淡青灰色を呈する。

25. 短頸壺：口径8.7cm×器高10.1cm×最大径12.4cm。

先端部を玉縁化して、わざかに外傾しながら立ち上がる、幅広の口縁部を有する平底の短頸壺で、底部は厚く、体部は中程で膨らみ、肩部に二条の沈線を施す。体部は下半から底部を回転ヘラケズリし、内外面にノタ目を残している。胎土は粗大砂粒と長石粒を含み緻密で、焼成は良好、淡青灰色を呈する。

26. 鳴：口径13.0cm×器高16.8cm×最大径9.4cm。

外反しながら立ち上がる口縁部と頸部の境に突唇を設け、外反する頸部は球状の体部に接合する。底部は丸くて厚く、上半に穿孔を有する。体部下半から底部を回転ヘラケズリし、



第15図 清水ヶ谷横穴群3号横穴出土遺物実測図(2)

全体を丁寧にナデ調整している。土は砂粒と長石粒及び赤色粒子を含み、焼成は良好、淡灰色を呈する。

27. 提瓶：口径8.0cm×器高21.4cm×最大径18.4cm。

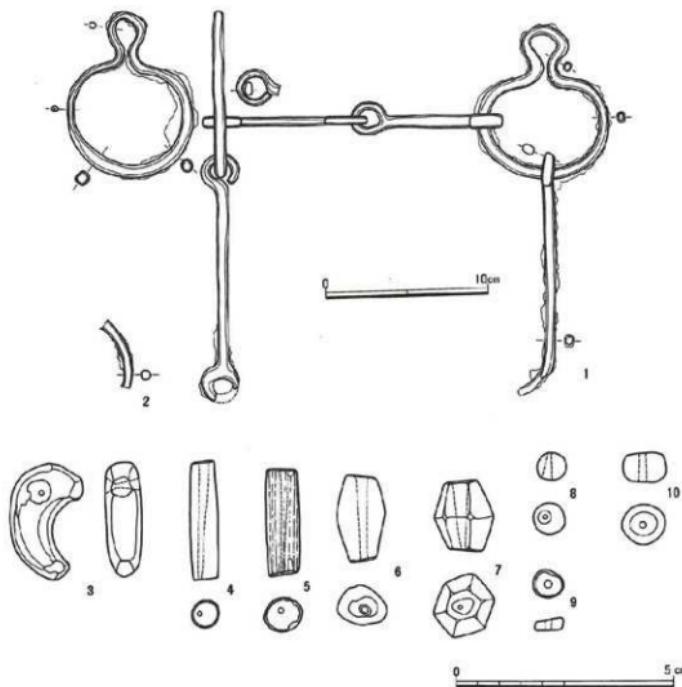
口縁端部を内傾させて、頸部との境に粘土紐を貼り付けて肥厚させている。肩部に2箇所の吊手を接着し、両平坦面は荒く回転ヘラケズリされ、ナデ調整される。胎土は長石粒と砂粒及び赤色粒子を含み密で、焼成は良好、灰色を呈する。一部に自然釉が掛かっている。

b) 鉄製品（第16図）

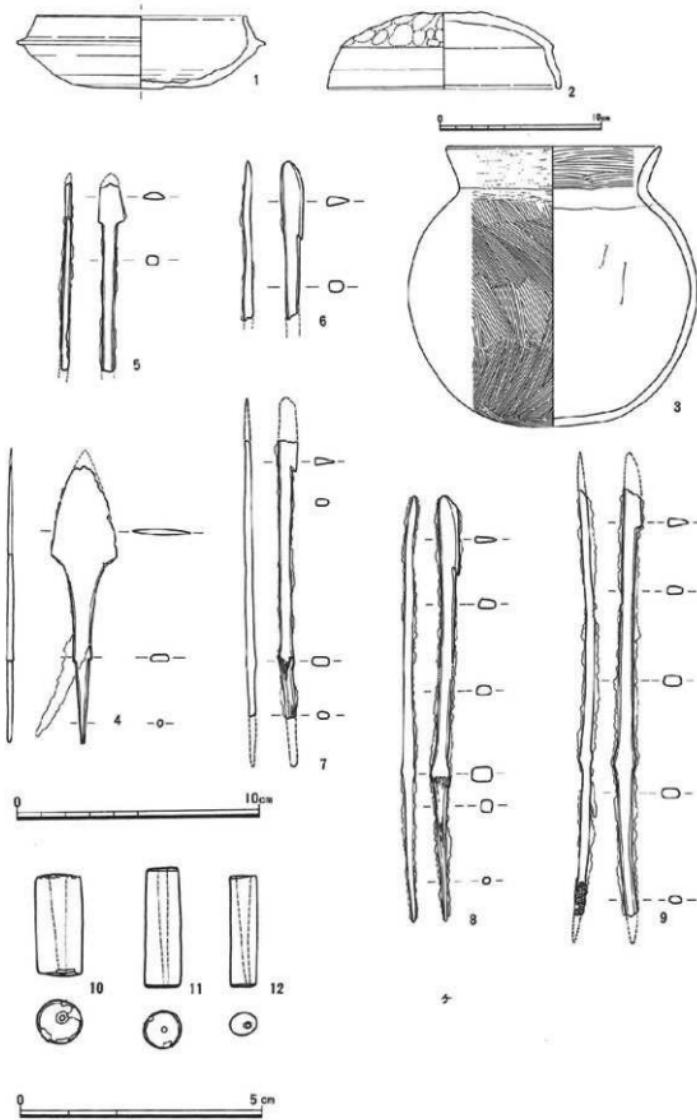
1. 曲：瓢形（ひさごがた）環状鏡板に、二連の銜（はみ）と引手を結合させる形の器である。

立開部を含めた鏡板の全長は9.5cmと10.4cmで、幅は8.0cmと7.7cmをそれぞれ測る。引手の全長は14.8cmと15.3cmを測る。各部の断面形は、その大きさがまちまちであっても、方形を呈し、厚さ1mm程度の鉄板を用いて筒状に作っていて、軽量に仕上がっている。

類例には、山梨県東八代町稻荷塚古墳例がある（末木 健『稻荷塚古墳』山梨県教育委員会 1988）。これは銜先環に引手を結合させる型で、また引手壺の形状も本例とは異なるが、



第16図 清水ヶ谷横穴群3号横穴出土遺物実測図(3)



第17図 松ヶ谷横穴出土遺物実測図

鏡板や引手の全長が本例と近似し注目される。

2. 環状金具：環状を呈する金具の一部で残存長4.5cmを測る。

以上の鉄製品の他には、大刀や鉄鎌などの武器の出土もなく、盜掘も受けていない本横穴の副葬品におけるその組成上の偏りが注目されよう。

c) 玉類（第16図）

ここでは一部を図示したが、瑪瑙製勾玉2点（内1点は1/2が残存）、水晶製切子玉2点、水晶製丸玉1点、碧玉製管玉12点、珪化木製と考えられる棗（なつめ）玉1点、滑石製白玉2点、群青色ガラス大玉16点、ガラス小玉76点以上（群青色16点、黄色6点、赤褐色2点、緑色・空色等52点以上）が出土した。これらは第8図に示したように棺の想定部分から集中して出土している。さらに偶数個の種類から、仮に一連の形状であったとすれば、これらの玉は丸玉と棗玉を基準に左右対称の配置関係にあったと想像される。

以上の遺物から、本横穴は6世紀の後半に構築され、土器からも追葬は行われなかつたと判断される。

3) 岩滑松ヶ谷横穴出土遺物（第17図）

a) 須恵器

1. 坏身：墓前域から出土した須恵器坏身で、追葬時に片付けられた土器である。口径13.0cm、最大径15.4cmを復元し、器高4.5cmを測る。砂粒を多く含み、焼成は不良で、淡灰色を呈する。底部内面の中央に青海波叩きをみる。

b) 土師器

2. 坏蓋：玄室内に逆転して、内部に礫が詰まっていた。3と共に追葬時の片付けを受けた土器である。口径14.3cm、器高4.8cmを測り、焼成は不良で、赤褐色を呈する。頂部を指頭整形し、口縁端部を玉緑化している。

3. 蓋：口径13.4cm、器高12.6cm、最大径18cmを復元する土師器蓋で、焼成は極めて不良である。口縁部の内面と胴部外面は刷毛目調整され、口縁部の外縁と胴部の内面は丁寧にナデ調整される。

c) 鉄製品

4. 三角形造平根式の鉄鎌で、闊（まち）を有する。長さ11.5cmが残存する。

5. 片丸造尖根式の鉄鎌で、先端部の破片である。

- 6～9. 片刃箭造尖根式の鉄鎌で、明瞭に闊を造らず、全長17.7cmを測る8に見るように、長身の鉄鎌である。9の茎端には布痕をみる。

d) 玉類

碧玉製管玉8点、ガラス小玉12点以上が出土している。これらの玉類は開口部床面からも出土している。さきに注意した2面の床面のうち、下面に伴う遺物であると考えられる。

以上の遺物から、鉄製品に混在があると思われるものの、土器は6世紀後半代に属していく、この時期に本横穴が構築されたと考えられる。

5. 考察とまとめ

A. 横穴の年代について

今回調査された岩清水ヶ谷横穴群では、2号横穴を除いた2基の横穴から遺物が出土した。このうち1号横穴からは刀子が¹、3号横穴からは玉類と馬具が¹、それぞれ土器と共に検出されているが、馬具・刀子の年代については別項に譲り、ここでは土器について扱う。今回調査した岩清水ヶ谷横穴群では各遺構の概況で述べたように比較的多量の土器が出土している。特に須恵器については2基の横穴から合計28個、さらに3号横穴に限れば27個と多量の出土をみた。後世の擾乱を受けて既に開口していることが多い横穴としては、あまり見ることがない数である。同じ大東町内に所在する毛森山横穴群の17-1号横穴からは清水ヶ谷3号横穴をうわまわる量が出土しているが¹、こちらは正式な報告書が未刊である。清水ヶ谷3号横穴の須恵器の数は、菊川流域の中でも比較的多い部類に入る。遺構の現状で述べたように、3号横穴の場合、埋葬時の状態を保つ可能性があることから墓造当初のセット関係を復元することが可能である。この意味でも本横穴群の土器の占める役割は重要である。

また今回大東町のご厚意により、毛森山横穴群を始めとして同町教育委員会が所有する土器を実測させていただいた。既に出土位置が不明となってしまった土器もあるが、併せてその資料を発表し当地域の土器の年代を考える手掛りとしたい。

なお、毛森山横穴群は調査時に各支群に分かれて、字名を冠して呼称されているが¹、今回は所蔵品の注記にしたがって、通連番号で呼ぶことにした。

土器の区分 須恵器の中で最も器形の変化に富む器種は蓋環である。岩清水ヶ谷横穴群及び毛森山横穴群、その他からも多数の蓋環が出土した。これらの蓋環の特徴を挙げると次のようになる。

まず環身であるが口径11~12cmを測り、口縁部の器厚を増し蓋受けの稜が比較的鋭いものと、同じ口径で緩やかに外反しながら立ち上がり、蓋受けの稜を丸く仕上げるものがある。これに伴う蓋は口径12~13cmを有し、肩に稜を持ち口縁を直立させるものと、稜を持たず口縁部をほぼ直立させるものがある。この蓋と环はそれぞれセットをなす。これを第I類とする。

次にごく少数しか出土していないが今回検出した环の中では最大の部類に属し、口径は13cm・最大径は15cmを測る。立ち上がりは一端屈曲し、そのまま直に立ち上がる。蓋受けは水平に突出し稜は鋭い。これに伴う蓋は稜というほどではないが屈曲点を持ち外反気味に開く。蓋も大きく口径は14cmを測る。これを第II類とする。

第III類とするものは、环身の口径が8cm~10cmほどで器形は逆八の字状に開き、ほとんど退化した立ち上がりを付したものである。蓋は半球形をなすものが大半であり、稜を持つものは見られない。口径は10cm前後である。今回調査した土器の中で蓋につまみを持たない形態の环としては、器形・口径双方とも最も小型化した段階に属する。

一方第IV類とは环身・蓋とともにほぼ同じ口径を持つが、これまでとは異なり蓋と环身が反転した一群の土器がある。蓋側に身受けを有し、乳首状あるいは擬宝珠状のつまみを持つ。これに伴う环身は蓋と比較すると数量は少なく、今一つ明快さを欠くものの、口径と比して器高が高いものと、これとは反対に口径に比べ器高が低いものと2種類存在するようである。これを第IV類とする。両方とも蓋の返りの残り具合によって時期的な変化をたどることができそうである。

最後に述べる2つは量的には数が少ないが¹、前述の第IV類と同系統の土器である。1つは蓋に擬宝珠

状のつまみを持ち、返りを残す。これとセットとなる坏身にはしっかりと高台をつけた土器である。もう1つの土器はほぼ前者と似た形態をとるが、蓋は返りを消失し、つまみも擬宝珠状であるがかなり偏平化し、実際につまみとしての機能がこれで果たせるのか疑問である。坏身は箱形をし、これに高台をつけるが華奢な作りとなっている。前者を第V類、後者の坏を第VI類とする。两者とも蓋坏の口径は第IV類と比較して大型化している。

時期区分 主として岩滑清水ヶ谷横穴群と毛森山横穴群から出土した蓋坏を上記のように分類したが、口径（容量）及び外見的な特徴を見るとこれらの坏には幾つかの画期が認められる。中でも蓋坏の外見上での最も大きな変化は、蓋と身が逆転し立ち上がりが消失して蓋に返りとつまみがつくことである。先に分類した坏の中で第I類、第II類、第III類としたものが蓋と坏が逆転する以前の段階に属する。これに対し、第IV類、第V類、第VI類が逆転後の段階に属するものである。この点に注目して坏の中に画期を設けるとするなら、2期に分割できるが、さらに細かく見ると第V類と第VI類に蓋の返りの消失を基準に時期的な差異を認めることができる。同時に口径と器高の減少、すなわち器形の小型化とそれに伴う容量の変化及び蓋の球形化を軸に考えると第I類・第II類と第III類との間にも画期を設定することが可能である。このように岩滑清水ヶ谷横穴群・毛森山横穴群を中心に出土した須恵器の坏は2つの大きな時期に分割でき、それはさらに5つの小期に分けられる。

〈第I期〉 今回調査した中では岩滑清水ヶ谷3号横穴・松ヶ谷横穴がこの時期に属する。一方毛森山横穴群では、毛森山17-1号横穴から出土した、第I群とした土器がこれに当たる。これらは各横穴群の中では古いものがほとんどであり、特に岩滑清水ヶ谷横穴群ではこの時期に横穴の築造が開始されたのは確実である。多くの場合、横穴の築造が開始されるのは第I期に集中するようである。

蓋坏: 主として第I類と第II類の上器が副葬されている。この期の須恵器の様相は岩滑清水ヶ谷3号横穴の一括造物である程度うかがえる。先に第II類とした蓋坏は清水ヶ谷3号横穴と毛森山17-1号横穴から各1点ずつ出土しているに過ぎない。主流を占めるのは第I類とした坏である。

高坏: 蓋坏と同じく清水ヶ谷3号横穴で良好な資料が見られる。ここからは長脚の有蓋高坏のセットが5組出土しているが、ほぼ同形・同大で胎土も類似し同じ窯で作られた可能性がある。この高坏の坏部の口径は11cm~14cm、口縁は途中屈曲しながら立ち上がり、蓋受けを丸く仕上げる。脚部は大きく広がるが透かしではなく、端部の断面は方形で一部の高坏にはここに沈線を施すものがある。これとセットになる蓋は口縁がごくわずかに内湾し、端部を丸く押さえる。つまみは貼り付けか、ケズリダシかは即断し難いが、つまみの稜は比較的シャープである。蓋は全体的に肉厚な印象で、ばてっとした感じである。

一方、有蓋高坏とは別に少数ではあるが無蓋高坏も一部に見られる。毛森山17-1号横穴出土高坏がそれで、箱形の坏部を持ち口縁は直に立ち上がり、外面調整として坏の中央部に棱で区画した中に刺突を施す。脚部は細長く、端部断面は四角く仕上げる。全体的な特徴として脚部に3方向に2段の透かしを持つ。これらの特徴は比較的古い様相を持っており、出土状況に若干問題はあるものの第I期の須恵器の年代を考える手掛かりとなる。

その他の器種: 上記の2つの器種がこの時期の須恵器を構成する主要なものであるが、このほかに提瓶・小型壺等が見られる。提瓶は清水ヶ谷3号横穴からは小型のものが⁶（第15図）、毛森山17-1号横穴からは大型のものがそれぞれ出土している。大型のものは大きく外反する口縁と頑丈な作りの吊り手を持ち、外側には平行叩き目を、内面には同心円の叩き目を施す。小型のものの吊り手はこれより幾分華奢であるが、それでもまだ余り退化しておらず、提瓶としても古い段階に属するものである。

小型壺はこれまでと同様に先の2つの横穴から出土している。底部や胴部の形状と外面調整で共通する内容を持ち、相違点らしい所は口縁部の形状が異なる程度である。清水ヶ谷3号横穴出土例（第15図）

は短く直立する口縁をつけるのに対し、毛森山17-1号横穴出土例（第18図）はこれよりも幾分長く、緩やかに内湾しながら立ち上がる口縁部をもつ。なお、17-1号横穴ではこれを大型化したものに3方向に透かしをもつ脚をつけた台付壺も出土した。

土師器：壺・高壺・小型壺などが見られる。第Ⅰ期に属すると考えられる土師器は全て毛森山17-1号横穴から出土したものである。

蓋壺は口径がそれぞれ若干異なるものの、外面を指頭押捺による調整を施す点では共通する。高壺も矮を遺し、外面に刷け目を残す壺（第18図）も存在するなど器種・形態に古い様相を見せている。

〈第Ⅱ期〉 前段階における横穴の数はそれ程多いとは言えないが、第Ⅱ期になると倍増と言っているほど多くなる。この時期の横穴としては中台1号横穴、田ヶ谷1号横穴、毛森山22号横穴などがあり、横穴の造営がかなり普及した段階といえよう。しかし岩滑清水ヶ谷横穴群においては、第Ⅱ期に該当する横穴は1号横穴のみである。この横穴は支群の中では一番新しいものであり、これに後続する横穴は今のところ発見されていない。清水ヶ谷支群では、第Ⅱ期に早くも造墓活動が停止するのである。

蓋壺：第Ⅱ期に起きた蓋壺の大きな変化は、器高・口径ともに最小になり身と蓋が逆転したことである。蓋においてはこれとほぼ時期を同じくして乳首状のつまみを有するものが出現する。これには返りを持つものと持たないものを見られた。

この種の蓋は田ヶ谷1号横穴から出土しているが、後者の場合口径から判断して合子の身（第20図）に伴う可能性が多い。このような器種も前段階には見られず、この時期に出現したものであろう。

高壺：第Ⅰ期では良好なセットを認めることができたが、出土量は少なく壺との共伴関係も明確さを欠く状態にある。この時期では先に清水ヶ谷3号横穴に見られたような有蓋高壺は現存する資料には見られず、無蓋長脚高壺・無蓋短脚高壺の2種類に限られた。前者においては脚部に透かしを持つ土器ではなく、環部は脚に比べ大型で半球形あるいは椀形をなす。後者は計4点出土し、中1号横穴出土の1点が他より器高が若干低いことを除けばほとんど同一個体といってよい。これは清水ヶ谷3号横穴の場合と同じく同一窯で製作された可能性がある。

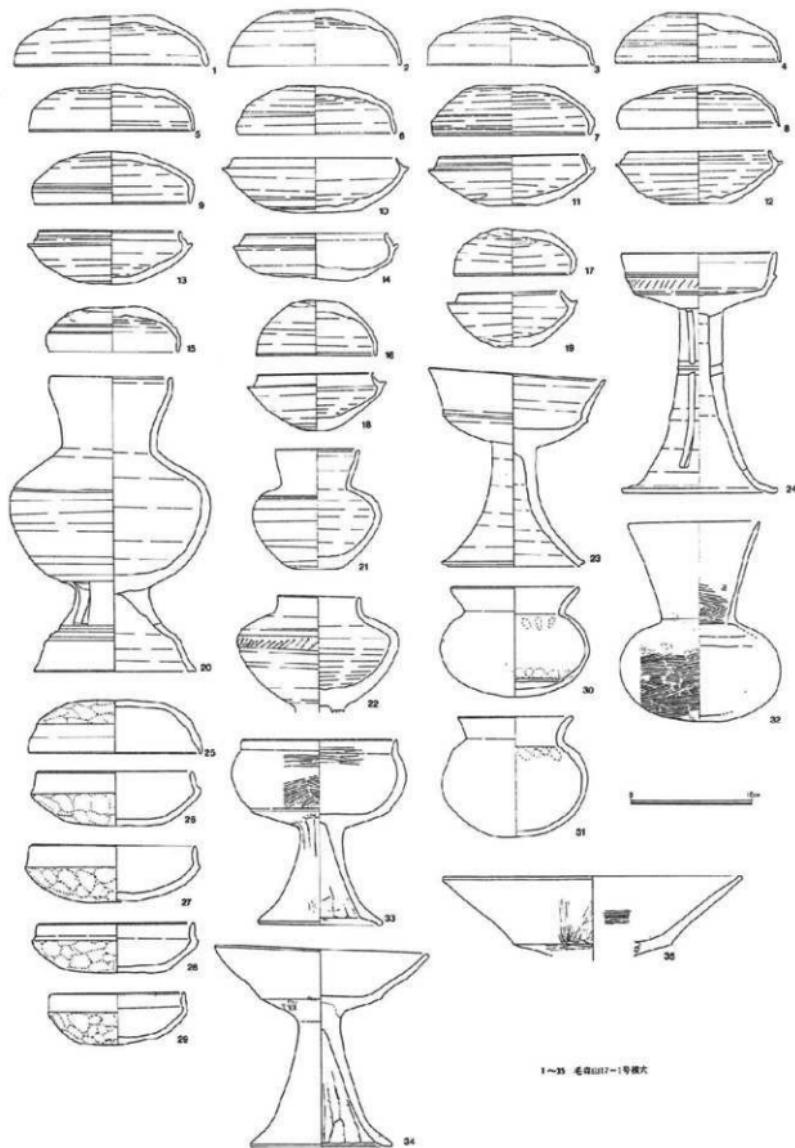
平瓶：第Ⅱ期に初めて出現する器種であり、これも須恵器全体に占める割合は少ない。ここで見られた平瓶は三者とも形態を異にする。毛森山24号横穴出土例（11）はまっすぐ延びる小さな口縁部をつけた球形に近い胴部を持ち、下半部に回転笠削りを施す。底部はほとんど丸底に近い。同25号出土例（10）も丸底に近く胴部下半部に笠削りを施すことには変わりはないが、胴部に比べ比較的大型で太く短い頸部を持ち、上半部に搔き目を施す。この二者に対し同11号出土例は小さな平底を持ち、頸部は大きく若干内湾しながら立ち上がる。

後二者は他に共伴する遺物は不明であるものの、形態的な特徴により第Ⅱ期に位置付けた。

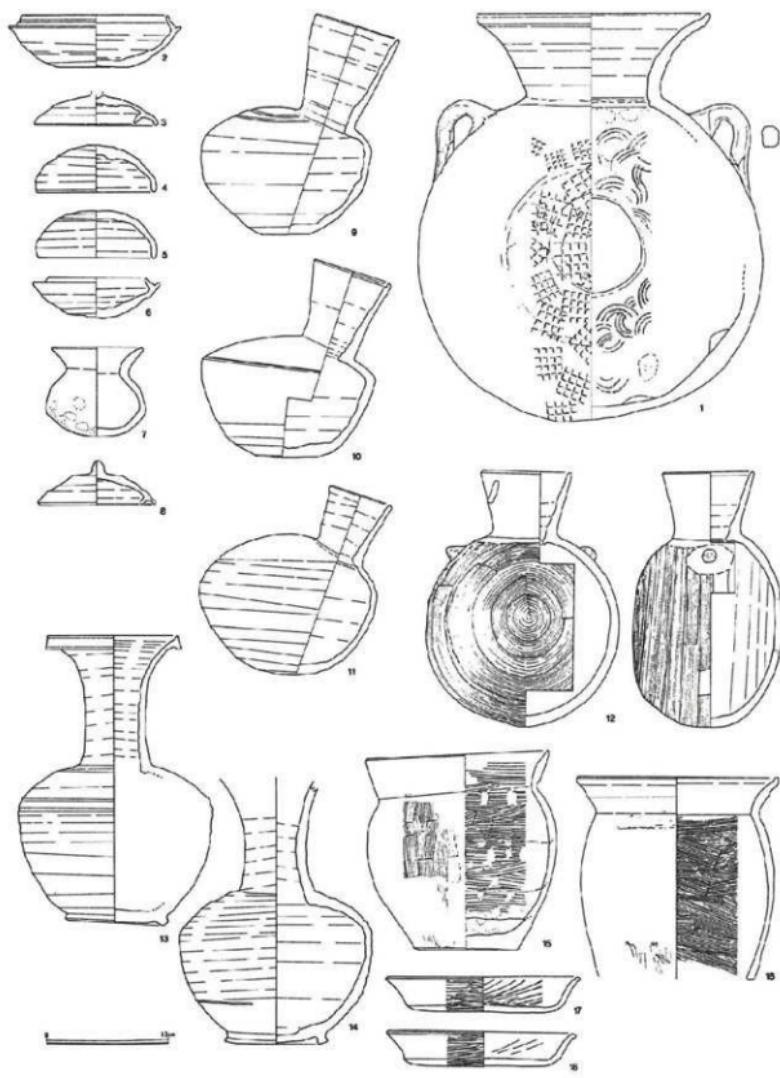
その他の器種：提瓶等が見られる。提瓶は吊り手の部分が退化し、毛森山出土のもの（第19図）のようにボタン状の突起をつけるに過ぎない。なお頸部を欠損しているので細頸壺の可能性もあるが、出土地不明の一点（第19図）はこのような突起すらなく、完全に消滅している。

土師器：3点の小型高壺が岩滑清水ヶ谷1号横穴において見られたに過ぎない。共伴した須恵器から見てこの時期に属するものであろう。

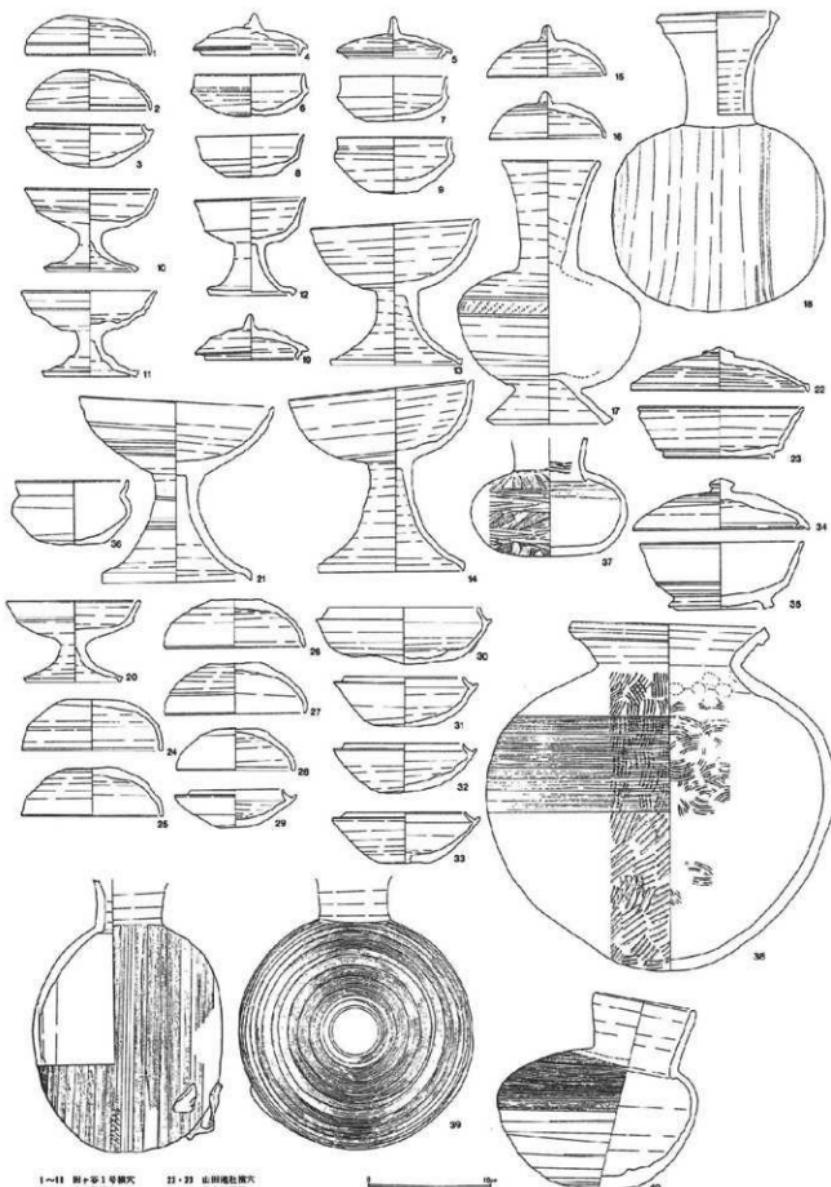
〈第Ⅲ期・第Ⅳ期〉 既に岩滑清水ヶ谷横穴群の造墓活動は停止しており、僅かに毛森山横穴群の中の14号横穴、22号横穴などからこの時期に属する土器が出土している。これまでの時期よりも土器の出土量は少ない。この期間、一部の横穴の造営は続いていると考えられるが、第Ⅲ期と比較するとかなり低調である。前述のように出土状態に不明の点が多いが土器の中には2次埋葬に伴うものもあり、土器が出た横穴が全て第Ⅲ期以後新たに造られたとは限らない。しかし、中心となる遺物が毛森山横穴群の遺物なので、このような横穴の状態は大東町周辺地域のと言うよりは同横穴群の傾向と言えるかもしれない。



第18図 大東町内横穴群出土遺物実測図(1)



第19図 大東町内横穴群出土遺物実測図(2)



第20図 大東町内横穴群出土遺物実測図（3）

れない。

蓋坏：この時期は第V類・第VI類の坏が主として副葬された時期である。第II期において口径・容量ともに最も小型化した坏は、第III期以後に徐々にまた大型化する。蓋の返りは退化する傾向があり、No.1のようにその痕跡を残すものが使用された時期を第III期、岩滑池田社出土の土器のように完全に消滅した段階を第IV期とした。この段階に属するものは2点しか出土していないので、これ以上の事柄を述べるのは不可能である。

平瓶：毛森山25号横穴から出土した1点のみである。第II期に比較して全体的な大きさは余り変わらないが、完全に平底となり肩部に明瞭な稜が付き口縁部は若干外反する。

その他の器種：毛森山14・15号横穴から高台付きの長頸壺が出土している。高台は比較的小さく、肩部は緩やかに変化する。第III期に属する土器であろう。

土師器：この時期の土師器で目を引いたものは、毛森山14号横穴出土の2点の皿形土器である。口縁部は緩やかに外反し、口唇部を若干肥厚させる。外面にミガキ、内面に半乾燥時につけたと思われる放射状の暗文を施し、前面を赤彩する。この土器は最も新しい第IV期の坏に伴うと考えられ、横穴に埋葬が行われた期間の下限を知る貴重な資料である。

年代　　今回発掘調査を行った岩滑清水ヶ谷・松ヶ谷横穴群、及び毛森山横穴群出土の土器群を中心とした資料を、上記の様に各期ごとに土器の組成を推測して見た。次にこれらの土器の年代について簡単に触れてみたい。

第I期から第IV期までの須恵器の変遷の中でも、とりわけ第II期を境に大きく2つに分けることができる。第II期では坏の身と蓋の関係が逆転し、同時に宝珠状のつまみが出現してそれまでの蓋坏とは大きく形態を異なる。これは主として製作技法が変化したためと考えられるが、言うまでもなくこの変化は各地の須恵器に共通して見ることができる。大阪府陶邑古窯跡においては身に蓋受けの立ち上がりを持つ最後の段階の坏はII型式第6段階であり、その年代を6世紀末から7世紀前半に設定しているが（注1）、一方近年これを若干下げる意見（注2）も出されている。

静岡県下では湖西地区の窯跡から出土した資料を軸に編年試案が行われている。先のII型式第6段階に並行する段階の土器は多くの古墳や古窯跡から出土した。最近西笠子第64号窯跡の調査報告書がまとめられた。この窯跡からはII型式第6段階より先行するから創業が開始されており、この出土資料を基礎に新たに編年が試みられている（注3）。ここではII型式第6段階の須恵器とほぼ似た特徴を持つ段階を湖西II期第6小期としているが、その年代を7世紀第2四半期に求めており、大筋においては畿内の年代に準じたものである。本横穴群の出土土器で第II期とした一群は湖西III期第1小期の土器も含むが、これらの土器を形態的に分類することは可能だったものの、出土状態などから時期的に細分することは不可能と判断したからである。おそらく第II期の年代は7世紀第2四半期を中心とした時期と推定される。

前後するが第I期の年代に関しては、岩滑清水ヶ谷3号横穴出土の皿形素環鏡板付き壺の年代が問題となる。同じ形式の壺の類例は多くないようだが、6世紀後半代を中心に古墳に副葬されている（注4）。また第I期とした無蓋高坏（第18図）は、箱形の坏部を持つほぼ似た形式の高坏が宇洞ヶ谷横穴からも出土しており（注5）、まだ検討の余地もあるが他の遺物から判断してこの形式の高坏の年代を同じく6世紀後半に求めることが可能である。第III期・第IV期については、毛森山14号横穴の土師器（第19図）が第IV期に伴う遺物とすればある程度その年代を推定することができよう（注6）。

以上簡単に年代について概略を述べたが、大体6世紀後半から7世紀末まで横穴への埋葬が続けられていたと考えられる。ただし、上記のような論の進め方では第I期と第II期の間に若干の空白が出来て

しまうことと、第Ⅳ期の年代が不確定なことが問題点として残る。前者の問題は、この空白期に岩滑清水ヶ谷2号横穴の造営が行われたと考えることもできるが、裏付ける証拠に乏しい。資料の増加を待ち、今後の検討課題としたい。

注1 中村氏の編年では特に年代については触れていないが、この点に関しては田辺氏の所見によった。

大阪文化財センター 「陶邑I」 大阪府文化財調査報告書第28集 1976

田辺昭三 「陶邑古窯址群I」 1966

注2 白石太一郎 「畿内における古墳の軌跡」 国立歴史民俗博物館研究報告第1集 1982

注3 中部電力株式会社静岡支店・湖西市教育委員会 「西笠子第64号窯跡発掘調査報告書」 1987

注4 関安光彦 「いわゆる『素環の壺』について—環状鏡板付壺の型式学的分析と編年—」 日本古代文化研究 1984

注5 静岡県教育委員会 「掛川市宇津ノ谷横穴墓発掘調査報告書」 1971

注6 内部に暗文を持つ土器は藤枝市白砂ヶ谷C-1号墳、同D-1号墳などから出土しているが、ほとんど蓋のかえりが消失している段階の环に伴う。ただし紹介した資料では其作關係が不明ではっきり言えないが、7世紀後半から8世紀前半の年代が考えられる。

参考文献

静岡県考古学会 「須恵器—古代陶質土器—の編年」 静岡県考古学会シンポジウム2 1979

静岡県考古学会 「古墳時代の土師器」 静岡県考古学会シンポジウム2 1985

坂本美夫 「馬具」 考古学ライブラリー34 1985

新納 泉 「單竈・單扉環頭大刀の編年」 史林65-4 1984

B. 横穴の基本的な設計について

横穴の形態を通観してみると、そこに様々なバラエティーを見つけるのは極めて容易である。

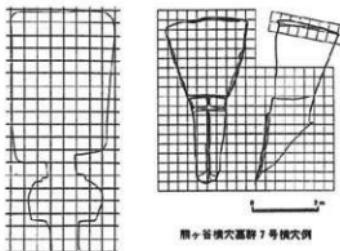
そして最初に気がつくのは平面形が左右対称でないことである。もちろん山腹に入力で空洞を掘削するのであるから不整形な点については無理からぬことである。しかしながら、全く形態が異なっていてバラバラかと言えば、そうではなくいくつかのまとまりに多数の横穴を分類することは可能である。そこでどうも横穴の掘削に当たっては勝手気ままに行うのではなく、一定の規則に従っていたのではなかろうかとばんやりと思われてくるのである。小稿はこの規則の、内容と程度に関しての基本的な疑問に接近することを課題とする。

最初に断っておかなければならないが、ここでは横穴の掘削が設計図に基づいて行われたと考えているのではない。同時に尺を用いて内部を計測したであろうことは十分推定できるが、現在の観察者である私たちがその計測点を確定できない限り、その物差しを復元したり、また設計図の存在を問うことさえ無意味であると考えている。

例えば、横穴の企画に関しては既に先学の試みがなされているが、第21図に例示したように方眼をかけただけでは、玄室の床面積を比較するならばともかくも、不整形に聞く玄室ラインや渓道ラインの説明はできない。それでも、各部位の基本的な比例関係は探ることが可能のようであり、第22図を準備してみた。まず、奥壁を始点にして横穴の平面図に1尺方眼を掛けてみると、確かに横穴の玄室幅や長さ、あるいは開口部の幅に整数値の縮尺関係が存在しているのに気が付く。しかし、この事実から設計規格があるのだと単純にかつ速断してはなるまい。というのもこの操作に用いた実測図は1/80程度の縮尺であり、図の1mmが現物の8cm誤差を内包しているのであって、実測図の作成時における測点の採り方によっても誤差は集積されるであろうし、第一、横穴掘削者がどこに定規を当ててどこを定点としたかなど証明もできようはずがないからである。

以下においては、菊川流域の横穴を対象に、1) どの程度まで規則性があるのか、2) その規則性がどのような原理に基づいているのかを考えみたいと思う。そしてこの原理が石室壙とどのように異なるかを比較して、横穴の特色の一端を明らかにしたいと思う。

1) 規則化された横穴について

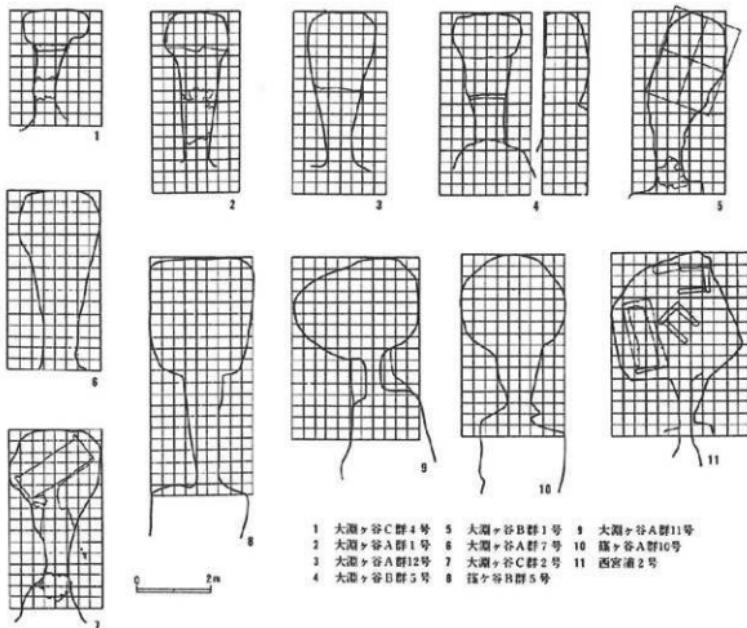


法皇山横穴古墳群5号横穴例

第21図 横穴の企画例

横穴には死者を埋葬する空間（玄室）とこの空間と外界を結合させる空間（渓道）からなるが、玄室は死者の身長あるいは死者を納めた棺の長さ以上の規模が必要であり、渓道の入口である開口部はその幅と高さ以上の規模が必要である。さらに付言すれば、横穴の軸と直交するように棺を納める場合には、玄室は棺が回転できるだけの広さが必要となろう。これを「棺に規定される大きさ」（註1）と呼ぶ。

従って伸展葬の場合およそ6尺（1.8m）の長さが確保されなければならぬ。棺の大きさについては、菊川流域の横穴群に広くみられる組み合わせ式箱式石棺を計測すればその規模を得ることができて、事実、菊川町大淵ヶ谷横穴群C群8号横穴の組み合わせ式箱式石棺はその外法で、長さ1.8m、幅0.6mを測ること



第22図 横穴規格想定図（1）

から、横穴の基本尺度の有効値が推定できるであろう。

さらに共通して横穴開口部幅が規制されているようである。これについても棺の幅の規制を受けるのであり、第22図に示した横穴にみるように、約2尺を探る横穴が最も多く、約1尺、約3尺と見られた。これも「棺に規定される大きさ」の一例と考えて良いであろう。

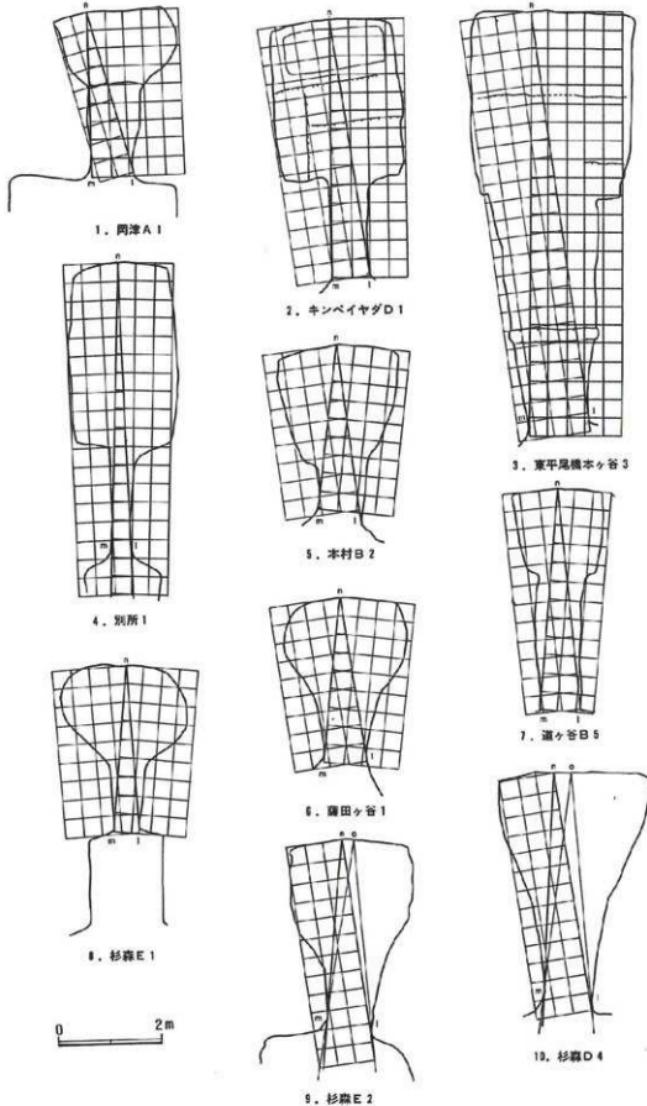
冒頭で触れたように横穴の平面形は不整形である。それでもなお、各横穴に共通して玄室に向かって開く左右の狭道部の壁面と床面の交線（狭道線と呼ぶ）が認められる。この狭道線の多くがまっすぐに仕上げられていて、玄室平面形のあり方と異なっているのに注意する必要がある。

以上のように、横穴は遺体の大きさ、あるいは棺の大きさに最も強く規定されていて、特に①開口部の幅に集中してこの規制が現象していること、また②狭道線が奥に向かって開き、しかも直線的に作られていることで各々の横穴に共通性が観察できるようである。次にこの2点の要素を基礎に設計の問題について考えを巡らせてみよう。

2) 横穴の設計原理について

ここではまず狭道線に注目し、第23図を用意してその基本形を探ってみよう。

直線的な狭道線はどのようにして掘鑿が可能かと考えてみれば、まず軸線を決めてからこの軸に直交するように物差しを当ててこれに平行する線分を得れば良いであろう。されば狭道線は玄室に向かっ



第23図 横穴規格想定図(2)

て開いているのであるから、逆にこれに沿う軸が2本必要になる。そして開口部から渓道線がまっすぐに仕上げられていて、しかもそれが屈曲していないのであるから、少なくともこの2軸は床面と開口部の2つの交点（開口点と呼ぶ）の内側を通っていないでなければならない。

そこで再度平面形に返れば、奥壁線を見ると1点の凹部または凸部が看取できる。これは横穴を掘削する際にして左右の壁面を前後して掘ったために生じた交点（これを奥壁交点と呼ぶ）であると考えられる。即ち、ここを発する軸で分かれて横穴の左右の壁が掘られたと推定される。

前述の②の開口点の強い規制から、横穴の平面形にあって極めて明瞭な「定点」である開口点をこの奥壁交点を出発する軸が通っていたとすれば、これも勿論可能性の一つに過ぎないのであるが、横穴は奥壁交点と2つの開口点で規則化されていると推測されるであろう。それでもなお、I) この3点が形づくる2軸が設計軸であり、これらによって各々の直交座標が組まれ、つぎにII) この上で実は横穴の両側壁が左右対称に近く設計されていることを説明すれば、この可能性は一段と高まったと言えよう。実際に横穴の平面形を検索してみると、きっちとこうした位置関係を示す例は少ないのであるが、以下に横穴平面図を例示して検討してみよう。

逸江に分布する横穴を手がかりにその設計軸を探ってみると、様々な形態を超えて上述の2軸型の設計が貫徹していることが判明してきた。そしてこの軸線の採り方で渓道線と一方の軸線が一致してしまうA類、玄室と渓道の形態を2軸が規定する横穴の内でも、玄室平面形や床面の段差とか溝を規定する設計軸が明瞭なB類、この軸の機能分化が不明瞭で、最も多數を占めるC類、及び玄室を規定する2軸と渓道を規定する2軸に分離してしまったD類に、それぞれ設計軸を視点に分類することができた。以下に第23図を使って具体的な検討に移ろう。

[A類] 1. 掛川市岡津横穴群A支群1号横穴

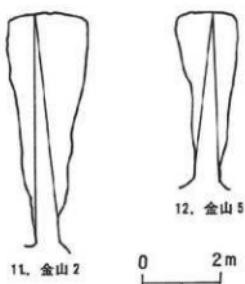
不整形な玄室平面形を呈し、玄室に比べて規模の大きな渓道を有している。6世紀の後半の資料を出土している横穴である。奥壁交点（m）を右渓道線の延長線（mn）が通り、奥壁交点（m）の左奥壁線と直角に交わる。一方、左開口点（l）と奥壁交点（m）を結んだ左軸は右奥壁線とはば垂直に交わっている。このように奥壁交点で分割された奥壁線がそれぞれの軸に対して直交する例は、後述するように多数にのぼり、設計軸と考える根拠の一つである。さらに左渓道線はむしろ左側の墓前域に規制されているようである。このように2本の設計軸を持ちながらも一方の軸が渓道線に重なる例をA類として分類し、類例には掛川市キンペイヤダ横穴群D支群1号横穴（2）を挙げることができる。

[B類] 3. 菊川町東平尾横穴群標本ケ谷支群3号横穴

玄室平面形が長方形を呈し、比較的大きな渓道を付す、大型の横穴である。7世紀中ごろの土器を出土している。左開口点（l）と奥壁交点（m）及び右開口点（n）を結んだ軸（lm, mn）を設定して、それぞれの軸から方眼を掛けると、A) 左渓道線は右軸mnに平行であり、右渓道線は左軸lmに平行である。これに対しB) 玄室平面形、玄門部段差と渓道部溝は右軸mnの方眼に平行し、右軸が平面の設計軸であることが判明した。このように玄室や渓道の床面に指標があつて、明確に軸の機能が分かれる例をB類に分類し、類例には掛川市キンペイヤダ横穴群D支群1号横穴（2）と床面での指標はないが左軸に玄室形が規定されると考えられる掛川市別所1号横穴（4）がある。さらには、指標を持たないC類とした他の多くの横穴においてもこの分化はあると想像している。

[C類] 5. 掛川市本村横穴群B支群2号横穴

比較的短い渓道部を有する横穴でしっかりと屈曲する玄門を作る。右軸（mn）が奥壁交点（m）の左側奥壁線とはば直角に交わり、左軸（an）は右奥壁線とはば垂直に交わっている。A類とした岡



第24図 横穴規格想定図(3)

津A群1号横穴のように左右の奥壁線がそれぞれの軸に対し直交する一例である。本類に含めて考えたい横穴は多数にのぼり、形態も様々である。浜岡町薩田ヶ谷横穴群1号横穴(6)は比較的短い渢道部を持ち、玄門部の屈曲が退化した例であるが、軸に直交する奥壁線を有していて、本例に含まれよう。袋井市道ヶ谷横穴群B支群5号横穴(7)は長大で、幅広の渢道部を有する横穴であり、菊川町杉森横穴群E支群1号横穴(8)はハート形の玄室平面形を呈し、いわば奥壁交点が開口部方向に向かって迫り出しているが、本類例に含めて良いであろう。

[D類] 9. 菊川町杉森横穴群E群2号横穴

両開口点から引いた渢道線に平行な線分の交点が奥壁交点(m)と一致せず、従って、それぞれの奥壁線と直交する2本の玄室の設計軸(lm, mn)と2本の渢道の設計軸(lo, on)が分離している例である。類例には同じ杉森横穴群D群4号横穴(10)がある。こうした軸線の相違が横穴の掘削当初からのものかどうか、換言すれば追葬時の改変でないかどうかは現在までのところはっきりしていない。今後の検討課題である。

以上の分類に付言すると、遠江では横穴の最終末の形態に膨張筒型と呼ぶ形態があるが⁵、これは玄室と渢道のくびれによる視覚的な分離が消失した段階の横穴である。第24図に袋井市金山横穴群2号横穴(11)と同横穴群5号横穴(12)を示したが、これらの横穴にみるように①渢道の短縮化と②側壁線の直線化が進行して簡略型に移行すると思われる。それでもなお2軸の設計軸を保持している点に注目したいと思う。最終的には、伊豆の横穴群にみるように、玄室平面形は長方形を探るに至り、従って、設計軸が1本に変化するのであろう。しかし、こうした平面形態の変化を年代を追って跡づけるまでには至っておらず、また地域的なまとまりを横穴の設計においても看取できるであろうが、それがどの程度のものかも不明である。資料の増加を待って検討を加えたいと思う。

これまでの検討によって、I) の軸線の設定と直交座標による平面形の設計については理解できたと思う。以下においては、II) の横穴の平面形が軸線によってほぼ左右対称に計画されている点についてみると、設計軸の補強をおこなっておきたいと思う。

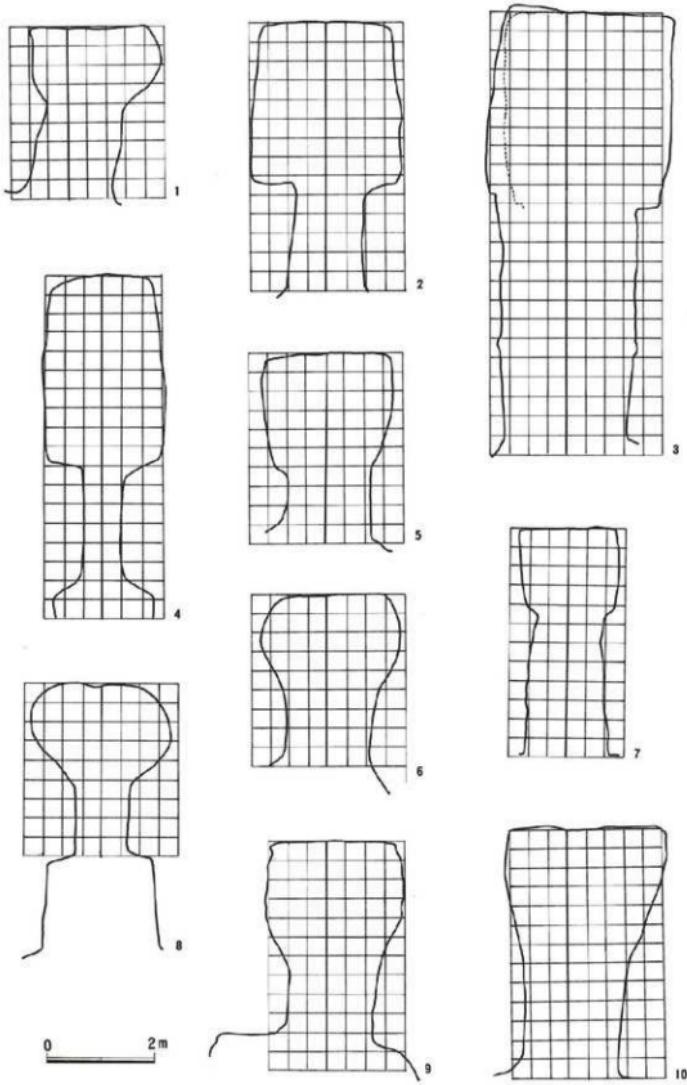
ここでは2つの軸線(lm, mn)のlとnを重ね合わせることで左右対称について見ることにし、そこで第25図を用意した。

岡津横穴群A支群1号横穴(1)は右軸線が偏在しているため両軸線を一致させた展開図は左右対称になっていない。しかし奥壁線は2直角をなし、この設計が直交座標系にあることを示していく、玄門のくびれ部が奥壁から等距離にあることが分かる。

キンペイヤダ横穴群D支群1号横穴(2)は大概左軸線が床面指標を規定する設計軸として認められたが、展開図は玄門の位置が左右で僅かに相違するものの、全く左右対称と言って良い。2軸を設計軸として考えられる。

東平尾横穴群本ケ谷支群3号横穴(3)は右軸が床面指標の規定軸であり、展開図では渢道の対称性に比べて玄室の右半は対称になっていない。これは点線で示したように、玄室の右半部を右軸が規定していく、また渢道部の左右対称性が示すように、左軸は右渢道部のみを規定しているからであると考えられる。

別所1号横穴(4)は僅かに玄門の位置が左右で相違するものの、平面形は左右対称であると言える。本村横穴群B支群2号横穴(5)は若干軸線の採用に誤差を含んでいると思われ、左渢道線の幅が広



第25図 橫穴規格展開図

いものの、平面形は左右対称形を呈している。

蔵田ケ谷横穴群1号横穴(6)は左奥壁線が設計軸と平行にならないが、おおよそ平面形も左右対称になっていて、また奥壁線も2直角となり、設計軸の要件を満足している。

道ヶ谷横穴群B支群5号横穴(7)は大概左右対称の平面形を呈し、奥壁線も2直角となっている。

杉森横穴群E支群1号横穴(8)は厳密には玄室の設計軸と羨道の設計軸とが相違していると考えた横穴であるが、報告書が未刊であり断定は避けなければならないが、これについては追跡時の改変を想定した方がよいかも知れない。玄室の平面形は左右対称とならないが、その外形線は近似する。併せて展開図において奥壁線が2直角をなすことからも、直交座標の上で平面形が描かれた根拠の一つに数えることができよう。

杉森横穴群E群2号横穴(9)は、ここでは玄室平面形の設計軸について展開図を作成してみた。平面形は左半部の方が右半部よりも幅が大きく、外形線は近似するものの、左右対称形にはなっていない。また、厳密にみれば、設計軸に羨道線が乗っていないが、あるいは誤差の内に含まれるとも思われる。

杉森横穴群D群4号横穴(10)は玄室の設計軸で展開図を描いたが、奥壁線が2直角となるものの、設計軸に羨道線が平行にならず、また左右対称にはなっていない。

以上の展開図の検討から、II)の2軸を重ねた横穴の平面形が(2)、(4)、(5)のように左右対称形を呈することから、これまで述べてきた2軸が「設計軸」である可能性が大であると理解できると思う。他方、この展開図を検討し、(1)、(8)から平面形の設計が基準軸からの距離を基礎に行われているであろうことが窺えよう。しかし、前述したこれらの設計方法の相違が小地域毎にまとまるのか、あるいは同様な設計の下にある横穴が同時代か否かを年代を追って検証するまでに至っていないのであり、これも今後の課題である。

結論

横穴の平面形がどのように設計されているかを考えてみた。本稿では、比較的玄室平面形の各コーナーがしっかりした横穴を対象にしたが、これらの横穴では2本の設計軸を設定することで横穴の左右平面形が同じ規格で計画されている可能性が高くなってきた。勿論、上に検討してきた数例の事例から横穴全体の設計を窺うつもりはなく、また今回の調査例を含めて橢円形の玄室プランを有する横穴についての言及は避けてきたが、不可知な構造をもった横穴、改変された横穴やいくつかの設計法が組み合った横穴もある。さらに断面形の問題、即ち立体としての横穴には触れる余裕がなかった。ますます今後の課題だけが蓄積される結果となってしまった。蛇足ではあるが、最初にも断わったように、横穴掘削者がどの場所を計画したかを、われわれ観察者が確定できないにも拘らず、安易に平面形を方眼座標に乗せて尺を復元したり、石室墳との類型化に急ぐあまり、横穴の形態に関する基本的な内在的な検討を回避してはならないと思う。

註1：これを、手をいっぱいに広げた大きさがほぼ身長と同じであることから、「尋」(約1.5m)と呼び替えてよいかも知れない。

参考文献

柳原松司ほか 「大瀧ケ谷 篠ヶ谷 西宮浦」 明星大学考古学研究部 1983。

平野吾郎ほか 「遠江の横穴群」 静岡県教育委員会 1983。

石川考古学研究会 「法皇山横穴古墳群」 加賀市教育委員会 1971。

池上悟ほか 「武藏・熊ヶ谷横穴墓群」 立正大学文学部考古学研究室 1985。

C. まとめ

今回の発掘調査において得られた成果を、次にまとめておくことにしよう。

1. 岩滑清水ヶ谷横穴群は3基の横穴からなり、3号、2号、1号の順で構築されたようである。その年代については3号横穴が6世紀の後半に、1号横穴が7世紀の中ごろに造られたと出土した土器から推定できた。特に3号横穴はこの地域での横穴の初期の形態を示しており、盗掘を受けていない貴重な例である。
2. 横穴の形態は共に丸底フラスコ形の平面形とドーム形の天井形を有している点で共通し、3号横穴と2号横穴が切り通しを呈し長大な墓道を備えるのに対し、1号横穴では墓前域の簡略化あるいは正面観の拡大と整備が進んでいるようである。
3. 1号横穴の開口部と玄門部には板で封鎖を行ったと推定できる溝が検出されて注目できる。これは菊川町東平尾横穴群橋本ヶ谷支群3号横穴に典型的にみられる施設で、現在までのところ7世紀の中頃に位置づけられる、比較的新しい横穴に見える流行の一形態である。
4. 1号横穴からは7世紀後半の須恵器と土師器及び刀子が、3号横穴からは、6世紀後半の須恵器と壺及び玉類が出土している。共に一時期の遺物群であり、追葬はなかったと考えている。
5. 岩滑松ヶ谷横穴は単独横穴であり、出土遺物から6世紀の後半には営まれていたことが判明した。特にその封鎖施設と墓前域の形態は類例を知らず、この地方の横穴導入期の一形態を示していると言えよう。さらに、2面の櫛床や片付けられた遺物の存在から、追葬があったと判断できる。墓前域から須恵器壺、玄室内から土師器环壺と甕、さらに玄室内から玉と鉄鎌が出土した。

岩滑清水ヶ谷横穴群 発掘調査報告書
岩滑松ヶ谷横穴

昭和63年3月10日 印刷

昭和63年3月25日 発行

発行／大東町教育委員会
静岡県小笠郡大東町三俣520
TEL (0537) 72-2211

印刷／みどり美術印刷株式会社
静岡県沼津市沼北町2-16-19
TEL (0559) 21-1839

図 版

図版 II

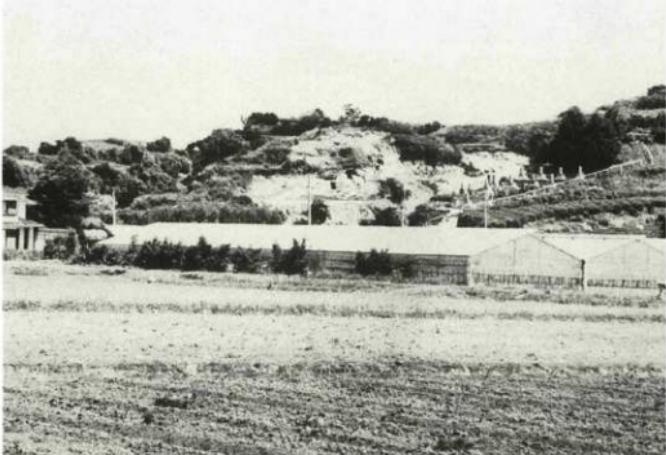
造跡遺景写真



図版 II

岩滑清水ヶ谷横穴群

1. 遠景1(南から)



2. 遠景2(東から)



3. 調査前景



図版 III

岩滑清水ヶ谷横穴群

1. 実測調査風景



2. 遺物の水洗
選別作業風景



3. 現地説明会風景



図版IV

岩清流水分谷横穴群
全 景



図版 V

岩滑清水ヶ谷横穴群

1. 1号横穴調査前景



2. 1号横穴全景



3. 1号横穴封鎖状態1
(上から)



4. 1号横穴封鎖状態2
(正面から)



図版 VI
岩滑清水ヶ谷横穴群

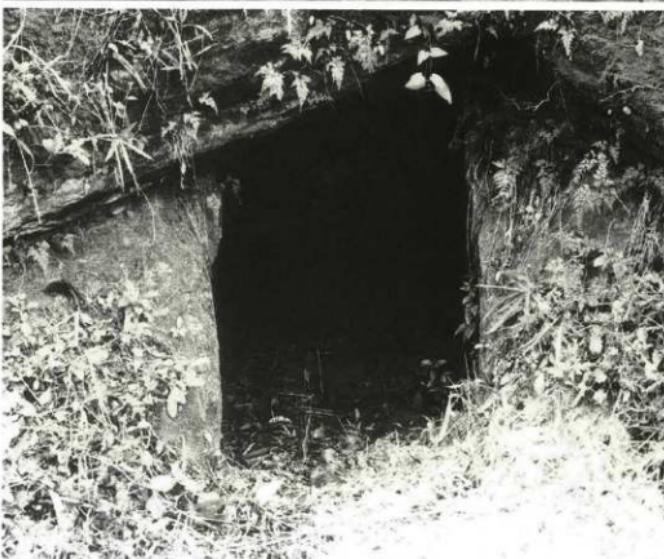
1. 1号横穴床面
遺物出土状態



2. 1号横穴奥壁
ノミ痕状態



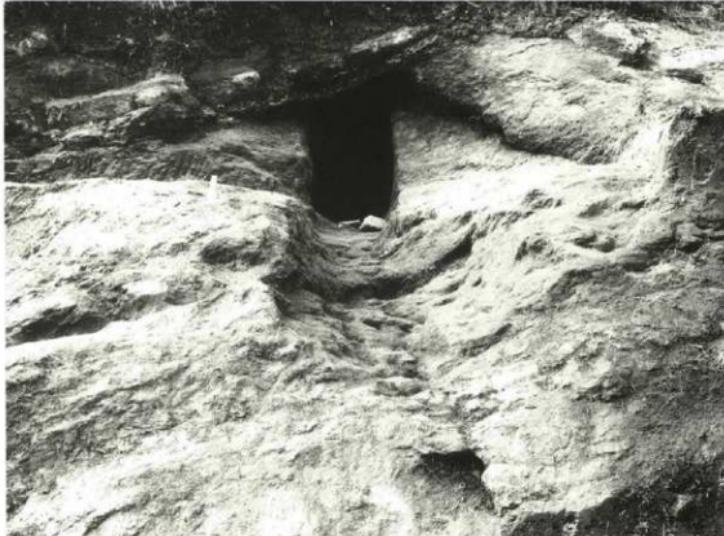
3. 2号横穴
調査前景



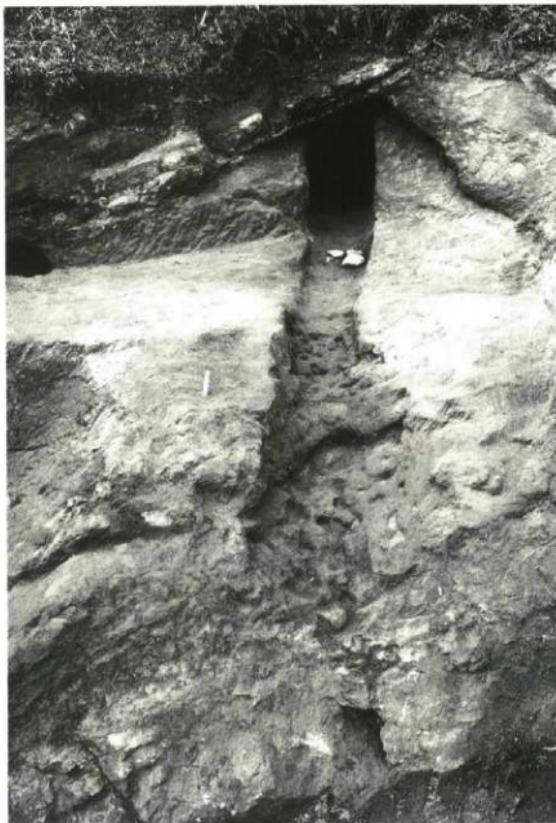
図版 VII

岩滑清水ヶ谷横穴群

1. 2号横穴完掘状態



2. 2号横穴墓前域状態



図版 VIII

岩滑清水ヶ谷横穴群



1. 2号横穴と3号横穴



2. 2号横穴天井部ノミ痕



3. 2号横穴左側壁ノミ痕



4. 2号横穴奥壁ノミ痕

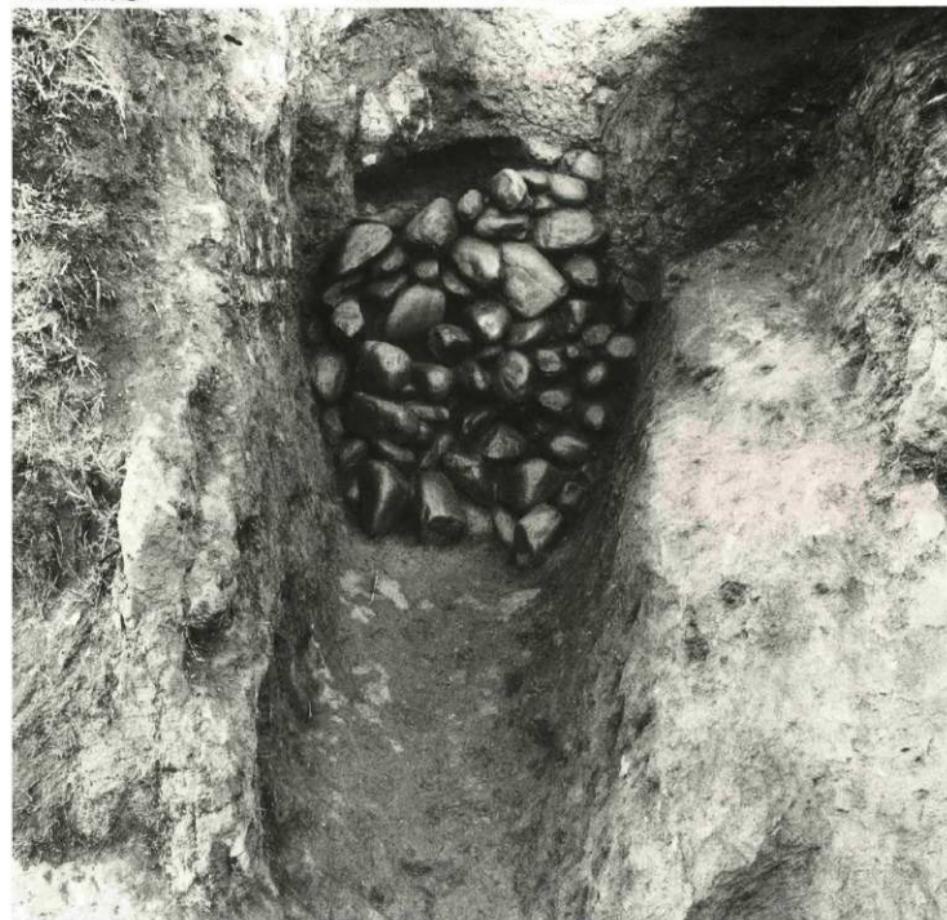
図版 IX

岩清水ヶ谷横穴群

1. 3号横穴開口部状態



3号横穴封鎖状態

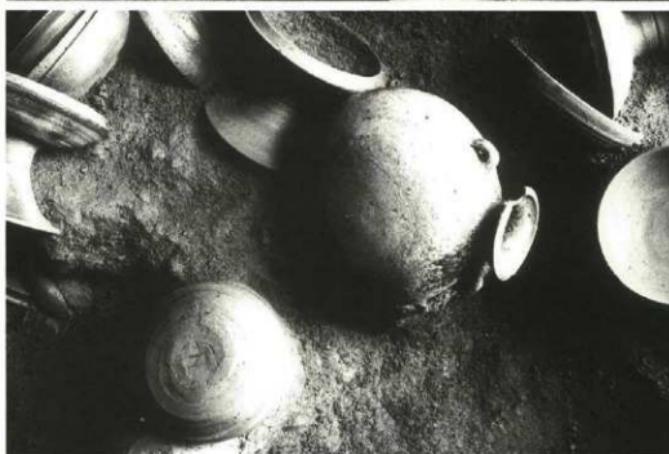


図版 X
岩清水ヶ谷横穴群

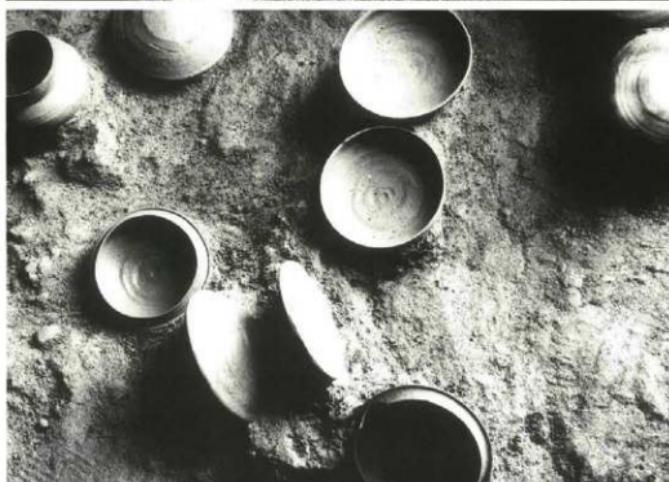
1. 3号横穴遺物出土状態 1



2. 3号横穴遺物出土状態 2



3. 3号横穴遺物出土状態 3



図版 XI
岩滑清水ヶ谷横穴群

3. 3号横穴遺物出土状態 4



3. 3号横穴遺物出土状態 5



3. 3号横穴遺物出土状態 6



4. 3号横穴玄室内状態



図版 XII

岩滑清水ヶ谷横穴群

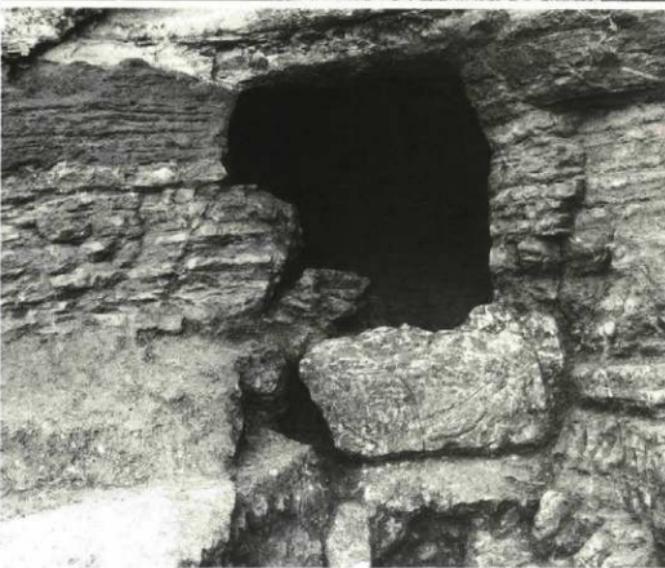
1. 横穴遠景 1(西から)



2. 横穴遠景 2(西から)



3. 開口部状態



図版 XIII

松ヶ谷巣穴開口部状態

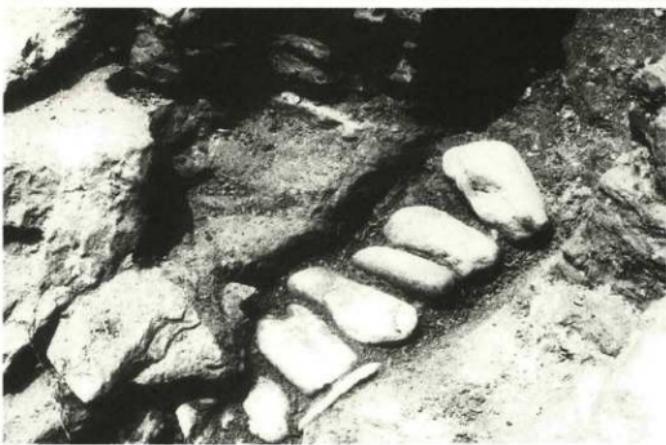


図版 XIV
岩滑松ヶ谷横穴

1. 玄室内遺物出土状態



2. 墓道状態 1(上面)



3. 墓道状態 2(中面)



図版 XV

岩滑清水ヶ谷横穴群

出土遺物 1

3号横穴



1



2



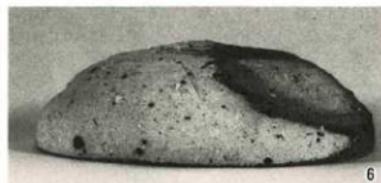
3



4



5



6



7



8



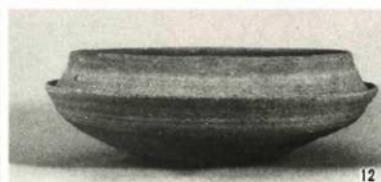
9



10



11



12

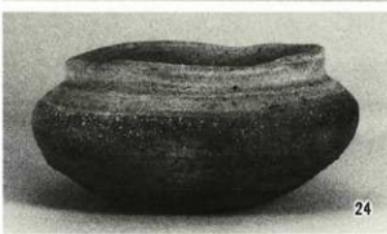


13



14

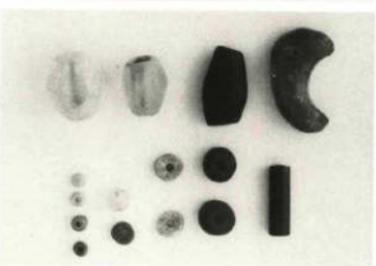
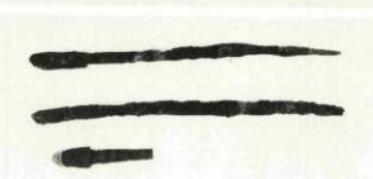
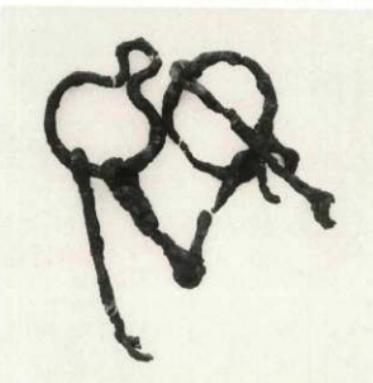
図版 XVI
岩清水ヶ谷横穴群
出土遺物 2
3号横穴



図版 XVII

岩清水ヶ谷横穴群
出土遺物3

24. 3号横穴
2.3. 1号横穴



轡 3号横穴

玉類 3号横穴

鉄鎌 松ヶ谷横穴

